

# うとう

協和うとう会五十周年記念誌



うとう



# 協和うとう会 50周年記念誌

## ----- 目次 -----

1. 50周年へのそれぞれの思い ..
  - 1) 生んで育てて50年(幹事の思い)
  - 2) 50周年への思いと近況(会員の便り)
2. 41回～50回の記録 .....
- 1) 各回の概況と番組
3. 50年の足跡 .....
- 1) うとう会年表
- 2) 記念誌の挨拶と座談会
- 3) 会員名簿
- 4) 演目・演者一覧表
4. 編集後記

# うとう

## 生んで育てて 50 年

高橋孝夫・富岡啓太郎・西村淳・岡田英明

### うとう会<sup>ことはじ</sup>事始め

富岡 啓太郎

#### 組合会合に出席した顔ぶれの『偶然』

事の発端は労働組合の会合で、磯部武夫さん、高橋孝夫さん、水原一瓢さんの三者が逢い会した際、謡の話になったことから始まる。磯部さんの言う事には「観世の舞台（当時は大曲の観世会館）で謡ったが、あの時は太夫になった気持ちだった……」とは高橋さんが富士工場に帰られてから聞いた話である。当時、富士工場には宝生の高橋さんのほかに観世の西村さん、大坪さんと私の三人がいたが、本社と東研にそれぞれ観世、宝生のベテランがいることを始めて知った。もちろん、もう一人本社に私が防府工場時代に西村さんと共にご指導を受けた大先輩の新井さんがおられたことは申すまでもない。

あの頃、これらの方々のテリトリーは

観世……新井：謡・仕舞・大鼓      磯部：謡・仕舞・小鼓

西村：謡・仕舞・小鼓      富岡：謡・仕舞・大鼓

宝生……高橋：謡・小鼓      水原：謡・小鼓・太鼓

確かこんな具合だったと記憶する。昭和 34、35 年ごろの話であるが、驚いたことに期せずして皆が皆、謡の他に鳴物にも関心を持っていたことである。その後各人それぞれ、人生の繁忙期にありながらその合間をぬって、笛にあるいは狂言にまでと芸域を広めて行ったのである。水原さんなど宝生流教授嘱託を経て職分となり野村蘭作師の文月会の能に出演すること 8 回にも及んでいる。

“趣味は真剣に、仕事は遊びで” とはあの転位歯車の世界的権威、日本学士院会員でありながら、趣味のフルート、コントラクトブリッジ、スケッチ、模型、飛行機、自動車その他を極められた中田 孝先生の言葉である。昭和天皇の御前講義まで勤められた先生がまさか遊び半分で仕事をされたわけではなく、逆説的に、「趣味をやるなら“その気で” やりなさい」と言うことを言われたのだと思われる。

まさに“うとう会”創成期のこれらの方々は真剣にその気で謡曲に取り組んでおられたことが思い出される。

そしてこのように皆それぞれ謡に止まらず、能楽全般に広い視野を持っていたことがその後の「うとう会」発展につながったように思われるのである。

## 昭和 35 年、熱海荘で「うとう会が産声、

ともあれ謡に止まらず舞、四拍子にまで関心を持つこれらの方々の間で社内謡会をやろうと言うことになり、昭和 35 年、熱海荘で第一回うとう会が開催された。

ところで「うとう会」なる名称、これは謡を謡ったり、鼓を打ったりして楽しもうと言う意図を込めて水原さんの発案で決まったものである。

このようにして発足した「うとう会」は年々成長を遂げ、素謡のみに止まらず舞囃子、番囃子まで立ち方から囃子方まですべて社内ではまかなえるようになって行ったのは奇跡としか言いようなく、他では滅多に例を見られないことである。謡のみに止まらず囃子にまで関心を持ったこれらの方々が居られたことが「うとう会」発展の大きな力となったことは否めない事実であろう。

ちなみに、昭和 55 年の第 19 回、会場も今 50 回と同じ可睡斎での出場メンバー 84 名中囃子を嗜んでいた者を数えてみると、

大鼓葛野流：3 名、小鼓幸流：5 名、幸清流：1 名、大倉流：1 名、太鼓金春流：2 名、笛森田流：1 名、藤田流：1 名

となる。これらの方々の熱演で独鼓、連調、舞囃子と大会を大いに盛上げている。

## うとう会の隆盛も「高齢化の進行、と共に…

以後、囃子を習得する者逐次増えて流派的には

小鼓：幸流・幸清流、大鼓：葛野流、笛：藤田流・一噌流・森田流、太鼓：金春流

と多岐にわたるようになっていった。それと同時に地拍子を解する者も磯部さん、高橋さんらの努力によって増えて行き、うとう会では素謡、仕舞、舞囃子は言うまでもなく、番囃子まで演じられるようになっていった。

しかしながら、このように伝統ある異色の社内謡会「うとう会」も近年老齢化が進み、立ち方、囃子方を勤め得る人は元より会員数そのものの減少に伴って、往時に比べて会の精彩さと言う点でやや退潮気味に感じられるのは私の僻目であろうか。

現役、OB、家族が一体となって “謡い、舞い、囃す……うとう会”

この後どのように環境が変わって行っても、私たちのこの異色ある会を護り育てていきたいものである。そして大いに楽しんで行きましょう。

“幸福な人生を歩んでいる人には、ある共通点があります。

それは仕事以外に心から楽しめる趣味を持っていることです”

——J. マーフィー

(H23. 5. 26 記)



# 懐旧の年々<sup>としどし</sup>

西村 淳

《メモ》 昭和 26 年入社から昭和 59 年卒業までの勤務地と期間

富士工場勤務 2 回(計 7.5 年) 技術課発酵係

防府工場勤務 2 回(計 7.5 年) 製薬課および製造第二課

本社勤務 ( 18 年 ) 特薬部・医薬生産部・研究開発部

## 1. はじめに

手許に「うとう」20 および 30 周年記念誌がある。今は亡き水原さんや安嶋君が主になって作られたもので、とても懐かしい。これに創設当時のことやその後の経緯が詳しいので重複は避けることとし、記憶に残る事などを主に書き残しておきたい。

## 2. 心に残ることども

第 1 回の 5 年前、昭和 30 年 7 月に防府に出張の水原さんを迎えて、初の観世宝生合同謡会が開催されたが、今の協和うとう会のハシリといえる。最も熱心だったのが「西村さんであった」と水原さんが後に回想している。鮮明に当時のことを記憶しているが、多くの名とともに懐かしい限りである。

第 6 回の熱海のつるやホテルでは、東京のご夫人方とともに私の家内も参加しているが、その後も本社の夫人グループとして参加されるようになった。

このあたり(昭和 40 年頃)から仕事の重圧、長期海外出張、休職に至った脊椎カリエスなる難病罹患のためしばらくは不参加が続いたが、再びの参加となったのは昭和 52 年 11 月三井寺の第 16 回であった。「熊野」の「文之段」を気持ちよく謡えたことが思い出される。第 18 回の竜野市赤とんぼ荘は三木露風詩の童謡のほか、帰りに陸軍幼年学校時代の友人宅を訪ねたが、今は故人となってしまった。

28 回目は水原さんの大和六瓢能舞台であつた。この舞台については 30 周年記念誌の「小屋主奮戦記」に詳しいが、六瓢の意味がわからなかった。最近ようやく「六瓢＝無病」なる縁起文字で、丹沢の事故などトラブルの多かった水原さんらしい命名と理解することができた。

以上思いだせばきりが無いが、会場だけでも他に袋井の可睡齋、滋賀の多賀大社、奈良の薬師寺、鈴鹿の椿大社などなど……。世話役各位のご配慮とご苦労に深く感謝申し上げたい。

最後に、将来再び東京で開催の機会があれば、「靖国神社能楽堂」をお考えいただきたい。私が世話役のグループで何回も上演したことがあり、奉納が主旨ならば使用料は無料である。

## 3. 自らの謡曲、仕舞、囃子、狂言小舞などの遍歴について

30 周年記念誌に「勤め人と趣味」と題して、それまでの遍歴を記載したが、若干の重複を恐れずに以降を述べてみたい。

昭和 56 年 鈴木一雄・西山幸助両師に謡・仕舞を師事(両師ともに故人)。

昭和 57 年 大鼓葛野流宗家預かり・人間国宝・瀬尾乃武師(故人)に師事。

昭和 58 年 観世流名誉師範允許。

(昭和 59 年 協和発酵退職、浅井ゲルマニウム研究所へ移る)

平成 2 年 笛方一噌流一噌幸政師(故人)に師事。

平成 5 年 太鼓金春流三島元太郎師に師事。

平成 8 年 和泉流狂言師・石田幸雄師に狂言小舞を学ぶ。

以上が病癒えての復職後の歩みであり、一流の師に恵まれてとても勉強になった。

大鼓は序之舞まで行っただろうか、先生のご高齢と体調不良のためにやめざるを得なくなった。笛は熱心に勉強したので 3 年目の大会では居囃子「望月一鞆鼓と獅子」を一流の先生の大小太鼓とミスなく合奏、さらに 5 年後の先生の古希を祝う大会には人間国宝観世鍔之丞師(故人)の舞による舞囃子「三輪一白式(神楽)」を無事に吹き終え、良い思い出となった。この一噌先生も C 型肝炎のため、次の人間国宝に期待されながら亡くなられ、現在子息の一噌幸弘さんが活躍しておられる。

太鼓は 12 年ばかり稽古を続けられたが、大小鼓より掛声が難しかった。舞物を全部上げ、独鼓・独調・一調と大分進んだところで都合により退会した。

狂言も小舞を師についてと思ったが、どこも満員とのことでやむなく朝日カルチャーセンターに入会、ここも野村萬斎師のクラスは満員のため石田師に教えてもらった。十余番はマスターしたが、文章・リズムともに一味違った軽妙さがあり、面白いものであった。

番組を見ていくと、初期のころは小鼓、しばらくして大鼓、次いで笛で出演している。太鼓は近藤明君(富士工場)のを借りて打った記憶があるが、あるいは交誼会でのことであったかも知れない。

#### 4. 謡曲関連の諸活動

自分たちで創立し世話人となった会のほかに、既存のグループに入って流友らと交遊したことも忘れ難い。

**A. 旭謡会：**大病癒え謡再開後の昭和 52 年から地域の交流の場として設立、17 年間、月 1 回実施していたが多忙となり今は中止している。

**B. 観葉会：**本社謡曲部指導の小野葉満子先生を招いての稽古会。昭和 54 年頃から始めたが先生とは意見が合わず 2 年ほどで退会、その後会員が漸減し消滅した。

**C. 四街道観謡会：**昭和 53 年四街道市の全愛好者の定期会として 1 月と 8 月(歌仙会)に開催、本年で 33 年続いているが、このうち 21 年は私が代表幹事となりお世話した。

10 年、15 年、20 年、30 年と立派な能舞台のある国立能楽堂・MOA 能楽堂等で記念大会を開催。また皆さんの寄稿を得て記念誌『かんよう』1・2・3・4 号(ほぼ 100 ページ)を発行している。

**D. 同台謡曲同好会(同謡会)：**陸軍幼年学校、陸軍士官学校出身者の会で観世、宝生、喜多の三流からなる。

平成 4 年、私と同期宝生流の友人の呼び掛けで始まった。総員約 25 名、70%が観世流でありレベルは高い。この会では 3 カ月に 1 回、偕行社和室で謡・仕舞の定例会を開き、私は主として地頭を勤めているが特別会を年に 1 回ずつ持っており、この方が印象深い。すなわち今までに靖国神社、明治神宮、乃木神社、東郷神社、湯島神社に奉納のほか、熱海の MOA 能舞台、鎌倉能舞台、磯子の久良岐能舞台等、また塩原や箱根で

温泉を楽しみながら会を持った。

忘れてはならないのが「偕行合同謡曲大会」である。平成6年7月、国立能楽堂に全国の陸軍士官学校出身の同好の士が集まってきわめて盛大な会を持った。このための諸準備はほとんど私一人が担当し、何のクレームもつかなかった。

現在、私は後述のように病氣療養中であるが、代表世話人役を今なお勤めさせてもらっている。

**E. その他：**ベテランが揃った「一<sup>いちりゅう</sup>旒会」、新井純さんもメンバーでであった学士会の中の「村雨会」、大手町の帰途の「香謡会」、千葉市で長い歴史のある「紫雲会」など数年から十数年勉強させてもらった。特に「一旒会」では、今は故人の馬越恭一さんから自作謡曲(文章、節付け)の楽しみを教えてもらったことは忘れられない。

## 5. おわりに

20歳くらいの時謡曲を習い始め、やむを得ぬ中断があったが足掛け60余年謡曲を「我が友」としてきた。謡・仕舞(舞囃子・演能を含む)の他に四拍子・狂言小舞を勉強したことも懐かしい。いろいろな会を設立したり、その世話人を引き受けたり、我ながらよくやったと思っている。

昨、平成22年2月13日、会社卒業時から26年間続いている熱海の梅園で観梅する会——旧研究開発部を中心とする旧友10名が集う「熱海会」の前夜、熱海荘において突然倒れた。一晩苦しみ、翌朝、救急車で運ばれ、心房細動起因の脳梗塞と診断されて入院40日。その後千葉の病院に移って30日、5月から自宅療養の身となった。

爾来1年4ヵ月、回復は遅々たるもので、歩行・発声・運筆に多くの困難があるが、数年後の復帰を目指して療養を続けていきたい。

因みに私は要支援1、家内も体が弱く要介護1にランクされ、ヘルパーに週一回掃除だけをしてもらっている現況である。

(以上、西村淳と妻道子の「名簿記事」を兼ねて…)

# うとう会とともに

岡田 英明

## 始めから囃子入りの謡を教えた水原先生

私がうとう会に初めて参加したのは、第10回浜松西遠荘、昭和46年10月24日のことです。いきなりの「嵐山」の地謡、「花筐」の地謡でした。今考えると、ずいぶん無茶な謡を、先生であった水原一瓢さん（故人）はやらせたものです。ヨワ吟もツヨ吟もまだはつきり謡えない時でした。水原さんは、素謡を教えるのではなく、始めから囃子入りの謡を教えたのです。これもずいぶん無茶なことでした。その頃は、本社、東京研究所、富士工場には大勢の宝生流の謡い手がおりました。

## 富士工場転勤で「稽古環境」に恵まれる

昭和47年に、本社から富士工場へ転勤となり、富士工場を足場に謡をすることになりました。三島には命尾静子先生がいらして、素人に謡、仕舞、囃子（小鼓、大鼓、太鼓、笛）を教えておられました。本名は蛭海静子とお呼びしますが、宝生流能楽師命尾家より「命尾」の名をいただいて、後進の指導にあたっておられました。先生は、小鼓幸流家元の内弟子だった時期がありましたので、囃子の指導には特別に熱心でした。

富士工場で宝生流の謡をやっていた多くの人が、命尾静子先生の稽古を受けていましたし、また観世流の人も、囃子を習いたい人が命尾静子先生の門をたたいたわけです。協和発酵の囃子、小鼓、大鼓、太鼓、笛は、大方がここ三島の命尾先生からの手ほどきがきっかけとなって、囃子の道へ入っていった人たちなのです。

命尾先生の会が隔月にあつて、囃子の会、素謡の会を次々となさるものですから、富士工場の私たちは、めまぐるしく毎回会へ出されたものです。三島大社で秋祭りに能を奉納、また中秋のころ佐野邸の庭で囃子の会、など1年が謡で過ぎていくようでした。富士工場の宝生流は、こうして実戦で鍛えられて、うとう会へ出たものです。命尾先生は、一つの曲をじっくりと習うよりは、実戦で数多くの曲をこなして、能のリズムを身につけることを重視していたようです。

三島に能楽師野村蘭作先生が教えに来ておられることを知り、私はそこへ入門しました。その後昭和55年に本社へ移ってから、20年以上に渡って野村先生について、謡を稽古していただきました。野村先生は、謡を囃子謡で稽古してくれました。野村先生は、全国に大勢の素人の弟子を持っておられましたが、謡を囃子謡で稽古していた人はわずかでした。

また思わぬご縁で、大鼓を葛野流の瀬尾先生に習うようになり、大鼓でうとう会へ参加することになりました。しかし、私の中には、大鼓よりは謡のほうが、重きをなしていたのです。

## 優れた指導者のもと50年の歩み

うとう会が始まって50年、うとう会はよくぞここまで来たものです。今までには多くの方がうとう会から離れていきました。その数だけでも、現在の会員を越えるでしょう。しかし、うとう会の躯体はしっかりとっていました。これは、なんといっても観世流では磯部武夫さん、宝生流では水原一瓢さん（故人）、高橋孝夫さんの指導と努力があつてこそです。私も、うとう会の歩みの中で成長しました。過去の番組の中に、自分の名前を見ると、当時の謡の幼稚な力量が思い出されます。私のうとう会の40年という時間は、重みのある生きた証です。

今のうとう会の楽しいところは、流派を問わず謡の進歩の著しい人を発見することです。思わず「素晴らしい」



と叫びたくなります。きっと、耳のいい人で、先生の謡をしっかりと聞き、それを声に出せるのでしょう。これは、謡の年期の問題ではなく、いい耳と、謡を声に出せる音感を持っているからなのでしょう。何しろ、能の基本は、謡ですから、謡の上手は「素晴らしい」です。

### 家元、先生を“真似”て謡を磨く

観阿弥は世阿弥に、上手の役者の芸を学べ、と教えました。

同じ流儀の能楽師でも人さまざまで、謡を声に出す声音の種類が様々です。しかし、どの流儀でも、家元の謡は流儀の謡い方に忠実に継承されていて、すべからく優れた謡をなさっておられるので、われわれ素人には家元の謡が勉強になります。謡には、発声の理屈などあるわけがありません。ひたすら能楽師の謡を耳で学び、真似をして、流儀の謡になっていくことですから、流儀の正しい謡を沢山聞くことが、まず始めです。謡の一節一節の謡い方を、能楽師の謡いから学び取る（真似る）、稽古場ではそれが難しいので、素人の場合は、録音された曲の先生の謡いを繰り返し聞いて、一節一節の謡い方を真似ることです。

世阿弥は、「自分の持って生まれた声の性質をまず心得よ」と言います。謡の声には、横の声（男声、太く強い声）と主（堅 しゅ）の声（女声、細く弱い声）の二つの質の声があり、それに合った声の出し方がある、と言うのです。

生来、横の声を持つ人は、主の声がかりに（声帯を緩めて少しはって）息を詰めて謡い、生来、主の声を持つ人は、横の声がかりに（声帯を締めて低めに）息をゆるゆると出して謡う、とあります。

しかし、それがどういうものかは、能楽師の先生について耳で学ぶしかありません。自分が師事している能楽師の先生に真似て謡うのがまずは当然なのでしょうが、やはり家元の流儀の正しい謡を知り、それを身につけることが、流儀に属することになりますし、教わっている先生が皆違う仲間と、一緒に謡う時に、同じ流儀で一つになれると思います。

宝生流は、謡の節付けの謡い方には特にうるさい流儀ですので、家元の謡をしっかりと耳に入れておくことは、非常に大事です。

謡を始めてから 40 年を経て、ようやく宝生流の謡らしくになってきて、今は先代、先々代の家元の謡を丁寧に聞き、自分の謡を磨く努力をしているところです。

### “囃子”のやり手減少を“謡い”で支えて……

うとう会もこの 15 年の間、少しずつ変わってきました。それは、うとう会の誇りであった囃子をなさる方が、減少する一方で増えないということです。同時に、囃子の地謡をする人も減少しております。居囃子、舞囃子、番囃子などをこなしてきたうとう会ですが、これからはそれも叶うことは無いでしょう。さびしいことですが、やむをえません。また、協和発酵という会社も姿が変わってしまい、協和発酵うとう会を支えた人もまた、変化していくのでしょうか。でも、能の基盤は謡です。謡う仲間がいる限り、協和うとう会は続いていくことを願ってやみません。

## 協和うとう会 会 員 名 簿 (50 音順)

謡って 打って 舞って……元気してます

### 50 年の歴史をつくった仲間たちの精進と近況

#### 浅原 方平 ——節目の 50 回への願望は…

第 50 回協和うとう会のご案内をありがたく拝見しました。50 回という節目の会には是非参席したいと願望は強いのですが、近頃めっきり体力が弱り、皆様方にご迷惑をかけてはと存じ、残念ながら断念いたしました。益々のご盛会と皆様方のご健祥を切に願ひしまして、ご返信申し上げます。(元大阪支社観世流)

#### 天野 美智子 ——いい習い事

志木市の公民館事業のサークルでお稽古しています。月二回ですが六名になってしまったグループで頑張っています。市の文化祭に参加したり、川越や新座の会とのお付き合いもあります。若い時から子育ての中も途切れず続けて来れて、幾つになっても大きな声で謡えることの幸せを「いい習い事」だったと感謝しています。(元在京夫人グループ観世流)

#### 石田 賢吾 ——三日坊主

今年六月の協友会で安嶋さんから、うとう会の名簿に私の名前が載っているとの話を聞き、少し驚きました。あれこれ五十年前の話し、森泰城さんに酒が飲めるからと誘われて水原先生の家に行き、「紅葉狩」の練習に三回程出ました。結局は三日坊主になりました。現在は調味料関係の業界団体と食品関係の技術士会の世話役を引き受け、目下多忙です。後二、三年で任期も切れます。下手なゴルフ、囲碁でもやります。お酒は程ほどに。(元東京研究所宝生流)

#### 大坪 一彌 ——謡を続けて新しい発見

謡について現況を知らせるようにとのことで、簡単に報告いたします。私は現在、校区公民館謡曲クラブで毎週一回稽古のお相手と、市内観世同好会の年四回の発表会への参加等、はや二十年余、まだ続けています。第 1 回協和うとう会の記憶は今なお鮮明で、これらの経験が私の謡が長続きた一因かと思っています。謡は続けることで新しい発見もあります。協和うとう会が若返り、永続きすることを祈っています。(元富士工場観世流)

### 大森 大陸 ——論考『草木国土悉皆成佛』

「草木国土悉皆成佛」はこれまでに習った謡曲本に頻出するお言葉で、中村元先生監修「新・佛教辞典」に“涅槃經の言葉”と記載されているので、長い間そのように思っていました。ところが岡田真美子先生（『在家佛教』2011年8月号）によるとこのお言葉は「鵲」「墨染桜」「芭蕉」「杜若」「六浦」「現在七面」「西行桜」「高砂」「定家」などに出ていることに続いて“現存するいずれの大蔵經の文獻にも見出せない”ことが紹介されていました。私はゆえあってハッキリさせておく必要に迫られ、在家佛教協会の内藤喜八郎先生にお尋ねしたところ、多くの佛教辞典類のコピーをお送りいただきました。それによると、どの辞典にもこのお言葉の項目はあっても出典經典の記載はなく、しかも上記の「新・佛教辞典」は昭和61年に改訂されていて、そこでは“涅槃經の言葉”が削除されて、代わりに“日本仏教の言葉”となっていました。しかし『涅槃經』には“一切衆生悉有佛性”と出ているそうですので、思想的に『涅槃經』に由来していて、それをさらに発展させたお言葉であることは確かなようです。たとえこの字句どおりが佛教經典になくとも、佛教の真義を思えばこのお言葉が出てきてもなんらの矛盾はなく、私大森は大いに帰依しているお言葉の一つです。（本社観世流）

### 岡田 英明 ——仲間と謡三昧の時間

住んでいる地区で、嘱託免状所持の人たちと会を作り、毎月謡の会を持って、謡っています。役の謡を磨きたい人、地頭の謡を磨きたい人、ひとそれぞれに目標を持って謡っていますので、勉強になるし、平均年齢七十歳ですが、いい謡いになるので気分がよく、皆楽しんでいきます。秋には箱根で合宿し、謡い三昧の時間を過ごします。謡の仲間と時を過ごす、謡の趣味を持ったおかげです。（元富士工場宝生流）

### 岡野 博子 ——謡曲から離れ「朗読」で充足

協和発酵を退職後、転勤族の夫とともに何度か引っ越しを重ねました。名古屋にいた頃は文化センターで謡曲と仕舞を習い、国立能楽堂の舞台に立つなど充実しておりました。この間にうとう会にも数回参加させていただきましたが、第45回の時お腹にいた息子はもう4歳。昨年、もう一人男の子が生まれ二児の母となりました。謡曲とはすっかり無縁になってしまった今、声を出して何か表現したいとの欲求を満たすため朗読を勉強しています。（元富士工場宝生流）

### 小田 文一 ——謡本は大切に保存

何時もながらお手数を煩わし恐縮に存じます。近頃はウォーキングと菜園の面倒見が中心の暮らしとなりました。協和とのご縁もすっかり薄くなりましたが、在家仏教誌は愛読しております。往時水原さんの熱心なご指導に曳かれ数を重ねた謡曲ですが、練習に使った本は今でも大切に保存してあります。

（元本社宝生流）

**小原 嘉人 ——初参加と同じ可睡齋**

私と謡曲との出会いは、水原一瓢先生が盛岡工場に勤務しておられた時で、宝生流の稽古に通ったのが始まりでした。水原先生の転勤で途絶えましたが、昭和 51 年に私が土浦工場へ転勤となり、富岡先生の勧めで観世流の稽古に励みました。退職後、盛岡に戻って稽古を中断していましたが、平成 6 年、地元の観世流の教室に入会して「謡と仕舞」を始め現在に至っています。うとう会への参加は土浦工場から第 16 回から第 21 回までの六回と、退職後は第 42・44・46・49 回の四回で計十回にですが、50 周年記念大会の会場が初参加の時と同じ可睡齋とのことで楽しみにしています。(元土浦工場観世流)

**鍛冶 義延 ——9 月、国立能楽堂で能の地謡**

広島の味日本(株)で 5 年目に入り、来年でリタイア予定です。謡は佐野萌先生ご逝去の後甥の佐野登先生に師事していますが、広島単身赴任もあり稽古は捗りません。9 月に国立能楽堂で能の地に座りますが、立ち上がれるかの方が気になっています。うとう会は、もともと弱小勢力の宝生は参加者が更に減って寂しい限りですが、今回は 50 周年記念大会ですので是非参加させてください。お世話くださる全ての方々に感謝申し上げます。(元東京研究所宝生流)

**加藤 會理 ——志を共に 10 年後 20 年後も…**

半世紀も続いているクラブであり、OB、OG と共に現役部員が活動しているのは、謡曲部においては他にないと思います。諸先輩方が築き上げた伝統を守り、後世に引継がなければならんと感じております。が、果たして……。新入部員を獲得するのは至難の業です。毎年、新入社員へアタックしますが、あっさり振られてしまいます。茶道、華道と違って、馴染が薄い地こたではないようです。茶道、華道も新たな部員が集まりません。それでも、入社後、文化祭やTVなどで謡曲を知った方、前から気になって機会があればやってみたい……。などで少しずつですが、“志” 同じ仲間が、波紋のように広がりつつあります。その、お仲間たちと細く長く、志を共に 10 年後 20 年後も、“うとう会”が開催できればと切に願っています。(富士工場宝生流)

**加藤 弥生子 ——“継続は力なり”を実感**

協和うとう会、創立 50 周年誠にオメデトウございます。謡に出会って三十六年になります。初めは謡のみでしたが、二十年前に大阪で磯部先生に師事しましてからは、小鼓も教えて頂き、十年前に防府に隠居後は久田舜一郎師に小鼓を教えて頂き今日に至っております。初めは難しく、困りましたが、めげずに続けたお陰で近頃は“継続は力なり”を実感しています。ますますの盛会を祈念しています。

(元大阪観世流)

**加藤 包子 ——元気な頃は楽しく…**

メールありがとうございます。ご無沙汰しております！元気な頃は謡も楽しませて頂きましたが今は何もしておらず聞かせて頂く方になってしまいました。皆様のご発展をお祈りしております。

(元在京夫人グループ観世流)

**上森 茂 ——定年後の最初が「50 回記念大会」の巡り合わせ**

第 21 回滋賀・多賀大社の協和うとう会に初めて参加させていただき、定年を迎え第 50 回記念大会に参加させていただきます。近頃は会場のお世話など四日市グループのみなさんに協力いただき、多少うとう会のお手伝いができるようになりました。またご縁により昭和 61 年から藤波重和先生のお稽古を受けることができましたが、平成 21 年 11 月諸事情で藤波濤光会四日市支部も休会となり、現在は四日市能楽連盟の行事に参加させていただくのみとなっております。(元四日市工場観世流)

**河盛 迪子 ——古典芸能の奥深さを痛感**

昭和 40 年ごろのこと、防府社宅で 150 円(謡本一冊)で 1 ヶ月遊べると天野美智子さんから誘われました。その後転勤などで先輩も去り、最初に教わった長沼稔雄先生が交通事故で他界されました。次に長宗一雄先生が社宅に来てくださり、そして関根祥六先生が東京から教えに来ておられて、そのお仲間に入れていただきました。昭和 55 年東京に転勤、服部幸さんが婦人部のリーダーとして交謡会やうとう会に参加しておられました。謡曲のおかげで一年に一度皆様にお会いできるようになりました。今は観世能楽堂でお能を鑑賞する機会も多くて、古典芸能の奥深さを痛感いたしています。

(在京夫人グループ観世流)

**北河 康之 ——時代の流れの中で部員確保に…**

協和発酵工業から協和発酵キリンとなり 4 年が経過しましたが、本社の様相もかつての面影を残さないほど変わってしまいました。人の出入りも早いため、会社の歴史を知っている社員もほとんどいなくなりました。時代の流れとはいえ、寂しいものを感じるとともに、謡曲部の伝統と歴史を途絶えさせないよう、日々新入部員の確保に奔走しているこの頃です。(本社観世流)

**木谷 芙美枝 ——主人の転勤先で新しい先生・仲間入り**

昭和 35 年防府社宅で謡の稽古に入れて頂いてから 50 年になりました。謡曲のおかげで、転勤しても新しい先生、友達に仲間に入れていただきました。謡、仕舞、舞囃子と夢中で稽古した日々、楽しゅうございました。中謡会、うとう会に誘っていただき、舞囃子を教えていただいた事、懐かしく思い出します。今は坂井音重先生にお稽古受け、名古屋の四つの同好会で謡を楽しんでいます。

(元名古屋支社家族観世流)

**久代 浩徳 ——謡曲から詩吟、そして英語の歌**

私のような落第生にも声をかけて戴き、感謝です。1997 年に定年退職した後、詩吟をかじりましたがこれも駄目でした。今は音大出のかなりグラマーな先生の下で、「英語の歌」の師事を受けています。外国船クルーズのカラオケパーティで、唱うのが目的です。「マイウェイ」や「思い出のサンフランシスコ」を歌って、青い目のシニア夫人から握手を求められたりするのが励みになります。

(元本社観世流)

**近藤 明 ——謡は言葉遊びの材料倉庫**

初めて協和酩酊謡曲の全社的集いに参加したのは、昭和 46 年 10 月 24 日浜松西遠荘での、第 10 回協和うとう会でした。爾来、四十年間謡曲との御縁に預かって来れました。高橋孝夫先生はじめ富士工場の謡い仲間の皆様のお陰に外なりません。謡いは喘息体質の私にとって物理療法の大切な手段です。また、短歌や俳句等、いわゆる言葉遊びのための材料倉庫としても利用させて貰っています。

(富士工場宝生流)

愛しや 命の限り 虫謡う あきら

**坂本 美枝子 ——正座と古典の世界で心の余裕を…**

うとう会は今回で二度目の参加になります。土浦の演目は「船弁慶」で私は「子方」を務めます。ベテランの皆さんとご一緒させていただくので、稽古に励まなくてはならないのですが、仕事や家事に追われ練習ができないといつも言い訳をしています。謡は奥が深く、2 年や 3 年ではどうにもなりません。うとう会の皆さんと知り合えたご縁と、ご指導いただいている山田和子先生(土浦)との触れ合いが楽しみで稽古にうかがっています。普段は機会が少なくなった正座で稽古することや、なかなか入り込めない古典の世界を謡うことによって、あわただしい生活から抜け出して心の余裕を持てたらといつも思っています。(土浦工場観世流)

**佐藤 恒治 —— 妙法華寺「鶴亀」で初参加…**

「光陰矢の如し」と申しますが、第11回、昭和47年、妙法華寺で初参加し「鶴亀」を謡ったのが懐かしく思い出されます。仕事の関係で四日市から離れ謡曲を中断した時期もありましたが、謡曲とのご縁でいまでは老後の生活に潤いの有る充実した日々を過ごしております。うとう会の先輩、会員の皆様に深く感謝しております。協和うとう会が何時までも継続されますよう祈ります。そのためにも精進、稽古して元気に過ごしたいと願っております。(元四日市工場観世流)

**澤野 忠男 —— 「山口国体」の運営に**

平成23年は、「おいでませ！山口国体」の年。謡との関係は遠くなったが、縁あって山口県テニス協会に関わり、国体のテニス競技に関係することになった。山口県テニス協会は、会場地市町、日本テニス協会等の支援を受けながら運営を担当する。運営は、審判をはじめ委員会の多くの方々の善意と努力の上に成り立っている。私は、事務局の一員として感謝の日々である。10月1日からの「山口国体」をぜひ応援してほしい。(元防府工場観世流)

**澤本 和容 —— 懐かしい「橋弁慶」**

協和発酵を離れて本年で六年経ちましたが、奥多摩に戻り忙しく過ごしております。森林インストラクターとして自然と森林とのかかわり、自然環境保全に微力ながら尽力しているところです。[沢本和容 検索]でご覧いただけます。今は遠い昔、新入社員として本社に配属になった時に、観世流の練習に短期間でしたが参加させて頂きました。うとう会では「橋弁慶」を連吟で謡ったことが懐かしい思い出です。(元本社観世流)

**鈴木 敏行 —— いきなり先生の口真似で「羽衣」のシテ**

私が謡の世界に入ったのは平成15年1月に土浦工場に転勤した。3月に謡曲部ただ一人の部員で今福岡にいる小林誠さんに誘われ見学に行ったのが最初でした。この年の6月の「交謡会」へ向けての稽古が次の週からいきなり始まりました。右も左も解らない中で山田和子先生の口真似でひたすら稽古し、ただ夢中で「羽衣」のシテを謡いました。それから「忠度」「通小町」「蟬丸」「清経」「杜若」「小督」「班女」などシテ、ワキ、ツレと人数の関係で稽古出演をしてきました。4年後に大ベテランの田辺博章さんが稽古に通って来られるようになり、また、平成20年には坂本美枝子さんが加わり、さらに幅広く稽古が出来るようになりました。(元土浦工場観世流)



**鈴木 正美 ——三井寺での感動二つ**

うとう会—それは“初心者最大の披露の場”であった。私のデビューは「鶴亀」、はらはらどきどき。三井寺で開かれた時の、朝もやの森に流れる笛の音に心洗われるひときは忘れられない。そして、もう一つ、西村淳さんが病から復帰し演じられた「熊野」。老母への思いをひしひしと感じ深く感動した。謡とともに太鼓の稽古をしたが未完成。

太鼓の間の芸見えず今至る

太鼓の強き響きに武の心

現在は謡から離れ、時間があれば釣りに費やしている。(元富士工場)

**瀬島 常雄 ——大阪へ赴任した日に磯部先生が稽古に…**

防府工場で独身時代、縁あって謡曲を始めて、「謡はこのように謡うものだ」とわかり始めたころ、九州支社へ転勤となり約 11 年間謡曲とはまったく縁が切れました。大阪支社へ転勤したまさにその日、磯部先生が教えに来ておられ、すぐ入部しました。私の謡の炎が消えていなかったことがこの奇縁につながったのでしょう。その後本社、再度大阪支社に転勤しましたが、いつの間にか謡のとりこになってしまいました。今は三宅稔一著の本で勉強をしたり、プロのテープを聞きながら楽しんでいます。今後もうとう会が続く限り頑張ります。(元大阪支社観世流)

**巽 俊一 ——脳裏に“三井寺の幽玄”**

協和うとう会 50 周年おめでとうございます。私は転勤が多く、謡曲のお稽古は土浦工場での短期間でしたが、今でもいろいろと楽しみを頂戴しております。テレビでの放映を出来るだけ視聴して謡曲百番集に眼を通してながら口ずさみ、昔に思いを馳せております。

参加致しました三井寺でのうとう会の幽玄な雰囲気は今でも脳裏に焼き付いています。協和の仲間の絆をしっかりと保つためにも協和うとう会の永続とご発展を祈念致します。私は年齢相応の起伏はありながらも元気に過ごしていましたが、東京協友会総会（注：本年 6 月永年努めた世話人代表を退任）を無事に終わり一息ついた 7 月早々に体調をくずして約 1 ヶ月間の入院治療を受けました。以降順調に推移して現在は体力も回復し、気力もまだ充分です。皆様のご活躍ご健勝をお祈り致します。

(元土浦工場観世流)

**但見 靖啓 ——古希祝いに「熊野」のシテ**

定年後、故郷に帰り、松江の謡曲の会に入った。高齢者が多く、毎年「〇〇さんの〇寿を祝う会」を催している。今年は、私も、古希を祝って頂く齢となり、「熊野」のシテを謡うこととした。第 41 回の「うとう会」で同じ役をさせて頂いたことがある。当時、松戸に住み、寝たきりの母の世話に時々帰っていた。その母も今は亡く、今年七回忌を済ませた。その母を思い出しながら、謡いたいと思う。謡とはなんと佳きものかな。(観世OBグループ)

### 田辺 博章 —— 謡歴38年

1974年春、新入社員として四日市工場に赴任した私は、滝川ヒロサトさんらが結成した詩吟部に入部した。富士電機に勤務する方を先生に迎えて、練習もまじめにやっていたが、その先生が海外勤務を拝命し1年強で事実上解散。そのとき、似たようなものじゃないかというので謡曲部から誘われた。これが私のうとう会歴の始まりである。それから38年がすぎた。1995年から8年間はうとう会事務局を務めた。うとう会欠席は薬師寺での開催の年の一度だけだ。四日市では熊沢章先生から手ほどきを受けたのだが、羽衣を習っている録音テープが手元に大切に残してある。おおらかに声を出すようにと教えられ、一生謡を続けるよう、もちやの仕舞袴を作れと勧められた。先生の宅で奥様が採寸してくれた。先生はすでに亡くなって久しいが、今もこの袴を身につけると、そのお声がはっきり聞こえてくるようだ。(元土浦工場観世流)

### 中里 宜資 —— 薬師寺の写経は貴重な経験

謡曲を始めたのが平成元年なので、20年以上も続けていることに我ながら驚いています。一時、鼓にも手を出した時期もありましたが、今は謡一本に集中して稽古をしています。ただし本気で練習するのは発表会直前だけ、というのは相変わらずですが……。思い出といえばやはり、うとう会で全国各地を巡っていることでしょうか。奈良薬師寺での写経は貴重な体験となっています。(富士工場宝生流)

### 西村 淳・道子 —— 自宅療養の身だが復帰を目指し…

(別項「うとう 生んで育てて50年」の「懐旧の年々」参照)

### 野口 貞夫 —— <sup>ふし</sup>節の楽譜を作って練習

私が「うとう会」に参加したのは 東研に転勤して岡地諒さんにお会いしたのがきっかけ。当時、コーラス仲間だった観世流の岡地さんに志村元さんと共に弟子入りし、楽譜を作って練習した思い出が懐かしい。私の転勤もありこのチームは解散、以後謡曲からは遠ざかったまま。現在、防府に住み昔の仕事仲間とボランティア集団（佐波の里山サポートネット）を立ち上げ、手入れ不十分の竹林・里山の整備に汗を流しています。(元東京研究所観世流)

**野村 忠亮 ——第 18 回の赤とんぼ荘が初参加**

うとう会には昭和 54 年の第 18 回協和うとう会（竜野市赤とんぼ荘）から参加させていただきました。最近では長く座るのが苦痛になってきたこともあってうとう会の方は失礼させていただいております。日々の稽古だけは続けております。先日、ご指導いただいている小野先生所属の坂井同門会で主催された白翔会公演を鑑賞しました。やはりプロの芸はすごいものだと感じ入りました。これからは能鑑賞の方にも足を向けようかと思っております。協和うとう会のさらなる発展を祈念しております。

（本社観世流）

**服部 幸 ——謡の擒虜<sup>とりこ</sup>から「俳句」の道へ**

昭和 36 年防府にて初めて関根祥六先生にお逢いしました。それから謡の擒虜となり、41 年に上京した後も先生に教えをいただき大変楽しい日々を過ごしました。現在八十六歳、主人をあの世へ送り出して十年、何となく元気に一人暮らしを重ねております。謡からは離れましたが俳句はまだ続けており、日夜苦吟の日々です。これからも人に迷惑をかけない日々でありますよう、心から願っています。

（元在京夫人グループ観世流）

**濱田 紳一郎 ——クセ直しに七年**

謡曲を始めて十九年ですがまだまだ難です。現在も続けていられるのは初参加の平成 4 年のうとう会で地謡の一体感に感動したからです。最初の十二年で自己流のクセがつき、正しい基本の謡い方に直していただくのに七年かかりました。今後とも力強く一体感のある地謡に積極的メンバーとして参加できるように地道に稽古を続けたいと思っています。

（観世OB会グループ）

**弘中 吉雄 ——遊び半分の農業の赤字は年金で補う**

記念誌発行のご尽力に頭が下がります。楽しみにしています。定年以來続けている水泳を中心に健康管理、泳ぐ距離は段々短くなりましたが、短くなった分水中歩行を増加しています。農地が少々あるので米と野菜を耕作、遊び半分ですが赤字は年金で補っています。ゴルフ、テニスを月に二〜三回程度プレーしています。外国旅行にはよく出かけましたが、最近では体力を考えて近場で我慢しています。

（元門司工場観世流）

**福井 清史 ——今も浮かぶ「三井寺」の感激**

一昨年の夏、胃がんが見つかり腹腔鏡による胃の全摘出手術を行いました。お蔭様でがんは初期がんで、今は順調に回復しています。したがって、最近は毎食後 30 分の散歩と自治会の皆さんと謡曲ではなくカラオケ、各種セミナー等に参加して楽しんでいます。

晩鐘の三井寺で、番組の最後に演じられた観世合同の番囃子「三井寺」を謡った時の感激は今でも頭に浮かんできます。良い思い出になったと思っています。(元堺工場観世流)

**藤沢 佐都子 ——85 歳で初めての可睡齋、上達ぶりに目耳みはる**

協和うとう会第 50 回にしました。大正 15 年 5 月 17 日生まれ 85 歳の私は皆様に親切にいただき、とても幸せです。織田信長は人生五十年と謡いましたが、長寿社会の現在です。うとう会の 20 周年・30 周年・40 周年記念誌と第 44 回(平成 17 年)名古屋浅井能舞台の 36 名の記念写真を並べて、これを書いています。第 19 回は宇部が休部中でしたので、可睡齋は初めてでした。幾棟もあるお寺で 50 畳敷き二間続きの会場は格天井と牡丹の襖絵です。大阪支社・堺工場謡曲部の現役がゼロになりましたが、久しぶりに参加した私は皆様の上達に目・耳をみはりました。(元大阪支社・堺工場観世流)

**藤田 良輔 ——あっという間に 50 周年**

協和うとう会 40 周年記念誌を見ると、私は 50 回にもぜひ参加したい、でもその時は七十八歳になると言っています。私にとって十年はいかにも長い、ましてや七十八歳などなどその時まで元気にしているだろうかと思ったのでしょうか。しかし十年はあっという間に経ってしまいました。この間、月二回の稽古、交謡会、うとう会への参加、年四回の「能」の鑑賞、いずれも謡仲間と一緒にやってきました。趣味は一人でもできるでしょう。だが仲間同士でするところに醍醐味があるのではないのでしょうか。(本社観世流)

**三池 公恵 ——親子で囃子の稽古**

第 19 回うとう会に連吟で初参加して以来、皆様とお会い出来る事を楽しみにお稽古を続けて来ました。大坪先生のお稽古の最中、私の膝の上でやんちゃをしていた長男も今年の 7 月、二人の子の父親になり、月日の流れの早さを感じています。高橋先生、富岡先生のおかげで長女と鼓の連調、中の舞を共演したり、男舞、序の舞の囃子の経験までさせていただき、覚えるのに一生懸命だった日々も今では懐かしく貴重な思い出になりました。(元富士工場観世流)

**水滝 彰一 ——初参加は第 19 回の可睡齋**

うとう会に初めて参加したのは、50 周年記念大会と同じ可睡齋で行われた第 19 回でした。小袖曾我の連吟でヨワ吟の節回しに大層苦勞したことを覚えています。また浅井能舞台での第 45 回には紅葉狩の舞囃子で太鼓を打たせて頂きました（冷汗）。歩みは遅々としていますが、毎年のうとう会がはげみになりこれまで続けることができました。うたいもお囃子もこれからが本番と思っております。

（観世OBグループ）

**緑 静男 ——懇親夕食後の「囃子」申合せ**

協和うとう会への初参加は 20 周年記念誌によると第 9 回(S45. 10. 18)三島・佐野別邸となっています。その後第 24 回(S60. 11. 2・3)まで続けて参加しましたが、第 25～40 回まで不参加で誠に失礼しました。そのため参加した第 24 回以前のことは、遠い昔のように思われます。印象に残っていることは 1 日目の夕食後、囃子の下合せで諸先輩に教えられ、鍛えられたことで、今となっては懐かしい限りです。

（元四日市工場観世流）

**三宅 隆夫 ——薬師寺のお粥・報恩・写経…**

協和発酵では酒類事業部で過ごしました。うとう会とのご縁をいただいたのは昭和 62 年～平成元年の大阪支社在籍時代のどこかであったと思います。今、赤面の思いですが、第 27～29 回に参加しました。自分なりに稽古して参加したつもりではありましたが、まあ、声を張り上げただけのことであったように思います。第 29 回では薬師寺に一泊。翌朝食のお粥を少し残し、小鳥の餌として屋根にまき、報恩・慈悲心だと教わり、初めての写経を経験したことなどを思い出します。短期間でしたが、うとう会の歴史に加えていただきありがとうございます。現在は故郷の防府市に住んでいます。

（元大阪支社観世流）

**森田 英基 ——部員増祈り、本社園遊会で「仕舞」披露**

最近は謡曲から遠ざかってしまし、ついぞ仕舞いを舞うなどということもなくなってしまったのですが、来たる 10 月 28 日の園遊会でのクラブ紹介で、舞うこと（はめ?）になってしまいました。現在昔のビデオを見直して特訓中です。一人でも現役の謡曲部員が増えてくれると祈念しつつ……。

（本社宝生流）

**守弘 董子 ——好きな曲はあっても得意な曲なし**

長い間のブランクを経て、現在の師に教えを受けるようになってから16年経ちました。月2回の個人指導なのでとても厳しいものでしたが、レッスン後の能楽にまつわるお話はとても興味深く楽しみでした。私は好きな曲はありますが、得意な曲はありません。私の今の悩みは「初番物」が苦手なことです。何年経っても「神物」のめでたさ、大らかさ、清々しさを感じないのですが、それでもやはり謡曲は好きですから、これからも欲張らず楽しみながら、謡っていこうと思います。(在京夫人グループ観世流)

**森山 孝広 ——初参加・出番後のお酒は格別**

2年前の富士工場への転勤後、同期入社の中里宜資氏に誘われて謡曲を始め、岡田先生にご指導いただいています。なかなか上達しませんが、お風呂の中で自然と口から出てくる日が来ることを信じて、気長に取り組んでいきたいと考えています。昨年はじめて、うとう会に参加し人前で謡いました。言葉を覚え、大変な汗をかき散々なデビューでしたが、出番を終えた開放感の中、美味しいお酒を飲むことができました。(富士工場宝生流)

**八尾 和廣 ——謡は細く長く……**

謡を始めて三十三年、最近膝の調子が良くなり会には椅子使用で参加させていただいています。これからも先輩方には何年経っても追いつけない分いつも目標として頑張れると思います。今年仕事をリタイアしましたが、謡は細く長く続けますので宜しくお願いいたします。(本社観世流)

**安嶋 将 ——番組メクリの「裏」で昔話に花**

昨年の協和うとう会からの帰路の新幹線で、会で使うめくりの「裏の話」を思いついた。元協和発酵酒類の不用店頭ポスターの裏に書いてある「めくり」を、酒類OB会で「本来の表の絵柄」をズラリ並べて話題にしよう…という狙い。会場の壁いっぱい並べた懐かしい麦焼酎玄海・VAT69・サントネージュポルカ…などのポスターに昔話の花が咲いた。そして「どうしてこれが…?」「この裏の筆文字はどう読むの?」などの質問がありネライは当たった。(本社観世流)

**薮下 尚夫 ——まじめに続けて本は100冊ほどに**

うとう会に入って謡曲を始めて約三十年になります。毎年の会には七〇%程度にしか出られなかったのが心残りです。お稽古はまじめに出席しましたので、本は百冊ほど溜りましたが、予習・復習することがほとんどないのでお稽古した実感のない曲がたくさんあります。そんな有様でも、近頃は謡曲の内容がある程度分かってきて、お能を観てもものすごく面白いとを感じるようになりました。うとう会に入れていただいたおかげです。(本社観世流)

**山家 多喜男 ——うとう会HPづくり、地元謡曲活動…**

私の「うとう会 50 周年」への思いは、すでに実戦レベルに達しており、最近も安嶋幹事と連絡しながら「うとう別冊」として、第1回～第40回までの資料を整理しホームページに掲載しました。

一方謡曲の練習は、一昨年末から市内の謡曲愛好者の会「土謡会」に所属し、毎週土曜日に3曲（年間130曲）を謡い上げ、改めて謡曲（地謡）の面白さを堪能しています。今年から四日市能楽連盟の事務局も担当し、各種催し物への参画も増えて、忙しい毎日を送っています。(元四日市工場観世流)

**山田 義之 ——磯部先生らのおかげで、良くもここまで…**

昭和44年網代荘(熱海市)での会に初めて参加させていただきました。途中何回か欠席がありますが、我ながら良く続けられたものだと思っています。これも福島先生と磯部先生のおかげです。うとう会では、いつも囃子の素晴らしいさ、熱心な申し合わせなどに感心させられます。仕舞も少し習い2回程出演させてもらったことがあります。不熱心のためモノにはなりません。

今回50周年の記念すべき会に参加させていただき、企画運営していただいた皆様に感謝申し上げます。大阪・堺グループは、磯部先生のお稽古がなくなり今後どうしようかと思っています。

(元大阪支社・堺工場観世流)

**山野 順三 ——未だに若手？四日市工場の現役一人ポッチ**

協和うとう会50周年おめでとうございます。うとう会は第28回水原先生の六瓢能舞台が初舞台で、その後発熱のために1回のお休みした以外は参加させていただきました。

いつも、会直前に練習をみていただいた上森茂さんも本年定年となり、四日市の現役は私一人となりました。

初舞台以来、20数年たっても、未だに若手？ですが、50周年のうとう会で皆様にお会いできることを楽しみにしております。(四日市工場観世流)

# 吉田 紀子 ——本社謡曲部の思い出

旧協和を中途退社してからも10年が過ぎ、うとう会となりますと30年？も前のこと、いまだ継続していることに驚いています。世話人方のご尽力の賜物でしょうね！。

謡に魅せられ、他の事業場には謡曲部なるもののあることを知り、経験者に音頭をとっていただき、本社内に観世流の謡曲部を立ち上げ、磯部武夫先生の下で「アー、ウー」と第一声を発しました。その後、小野葉満子先生に代わられてから仕舞を教えていただき、うとう会でも何回か舞わせていただきました。カジッタとも言えないくらいでしたが、今になってみますと、能はもちろん他の伝統芸能の舞台を鑑賞する際の助けになる貴重な体験でした。肝心の会社が何だかなあ……ということで何かと大変かとも思いますが、協和うとう会が末永く続きますようお祈りいたします。(元本社観世流)

# 渡辺 尚子 ——第22回が「うとう会デビュー」

学生時代にお能に接し、協和に入社して謡曲部があることを知り入部させていただきました。西村淳さんには昼休みに手ほどきをしていただき、随分お世話になりました。うとう会デビューは第22回の静岡県磐田市・醍醐荘。水原一瓢さん、森泰城さんと一緒にすることが懐かしい思い出です。第24回の神戸市・須磨荘では出番のないとき会場を抜け出して安嶋さんからお目玉を頂戴したことが忘れられません。

うとう会への参加回数は少ないですが、第45回からは皆勤で出席率20%です。元気なうちはこれからも参加させていただきたいと思っています。(本社観世流)



第41回 / 平成14年（2002）11月23・24日 / 大津市伝統芸能会館

## 三井寺（第16回会場）そばの伝統芸能会館 本格能舞台で謡い、打ち、舞う

かねて、大津に低料金で利用できる能舞台があるとの情報があり、大阪・堺グループが下見して確定した。使用にあたっては「教育委員会が不適當と認めたら」ダメ、「テープ等で貼り紙をしないこと」、「舞台で全員の記念撮影は許可を得ること」などの順守事項があり、緊張した。

全館貸切りのような舞台・見所・控えの間を何のトラブルもなく、伸び伸びと会が進行できた。全員の記念撮影は会館玄関の階段を利用しておさまり良くできた。

会場裏の円満院が宿舎で、精進料理を般若湯（はんにゃとう）でいただきながら「この肉そっくりの料理は何でできているの？」などの質問があるたびに、上森さんが台所へ走った。

翌朝はお隣の三井寺（園城寺）へ散歩して懐かしむ仲間もいた。そして会場で謡い終わった後のお昼と打ち上げは三井寺山門前の茶店の二階で行い、ドブプリ三井寺につかった協和うとう会であった。



連調「鐘之段」宝生（左から 近藤・中里・大橋・三池・加藤 / 矢尾・高橋）



仕舞「葵上」観世（木谷）



独鼓「玉之段」観世（山家 / 磯部・浅井）



素謡「花筐」宝生（前列左から 近藤・中村・平尾・大橋）



素謡「善知鳥」観世  
（前列左から 山田・水滝・竹林）



第 42 回 / 平成 15 年 (2003) 11 月 15・16 日 / 三島グランドホテル

## 富士工場のお膝元 懐かしい顔ぶれで賑わう

うとう会の事務局は、すでに田辺博章さんに交代していたが、定年を迎えた会員が会社を離れて連絡がとりにくくなったことに対応するため、OB仲間を一つのグループにしてまとめる役をつくり、安嶋が担当する体制が磯部武夫さんの肝いりでできあがった。

今回の会場は富士工場のお膝元ということも手伝って、工場OBの大坪一彌さんが九州・佐賀市から遙々参加され「小督」のシテを謡った。東京研究所出身の永山正子さんも駆けつけ独吟「融」を謡った。

新井純会長が久しぶりに参加できるとのことで、全観世の素謡「藤戸」のシテをお願いしていたが直前になって、やはり健康状態に自信が持てない…の連絡あり、磯部さんが代役をつとめた。(写真)

舞台は全宝生の素謡「通小町」で終演となったが、一日目の夕食懇親と二日目の打ち上げは結婚披露宴形式の舞台付き大ホールで伸び伸びと羽を伸ばした。打ち上げの席には、今回は参加できなかったがたまたま旅行中に三島へ立ち寄ったという謡い仲間の河盛迪子さんらが加わった。

この年の7月謡い仲間の鈴木正直さんが亡くなられた。うとう会の開催案内を送ったところ奥様から返信で知り、「浄土旅。正直のその名に生きて人々の。心に残る誠実や。弥陀のもとへとたちにけり。」をご仏前で謡わせていただいた。



仕舞「笹之段」  
富岡啓太郎



素謡「藤戸」全観世  
(前列左から)  
(磯部・富岡・濱田)



仕舞「田村」(中村)



仕舞「鶴亀」(岡野)



仕舞「嵐山」(森田)



仕舞「殺生石」  
(西本)



囃子「清経」  
(左から 富岡・加藤・平尾・水滝・磯部・浅井)



囃子「春榮」  
(後方正面左から 岡田・三池・村上)



第43回 / 平成16年(2004)11月6・7日 / 倉敷市・国民宿舎 良寛荘

## 良寛修行の地で“藤戸”を謡いツアー組む

謡曲「藤戸」ゆかりの地で、全観世のシテ西村淳・ワキ富岡啓太郎・ワキツレ安嶋将でこれを謡い、二日間のうとう会を締めくくった。また、良寛さまが修行された円通寺そばの会場というご縁もあってか、かつての謡い仲間浅原方平さん、永富正人さんがそれぞれ福岡・宇部から久しぶりに参加された。

閉会後には希望者がタクシー5台に分乗して、浮洲岩・藤戸寺・経ヶ島などの史跡を巡り、「現地」に赴いて「名所・古事・戦場…」を知ることができた(「謡曲十五徳」参照)。

新井純会長が会を欠席された時は、集合写真を添えて会の模様を安嶋将がご報告していた。すると、休日になると必ずお礼の電話が自宅にかかってきて労ってくださり、「写真の〇〇君の横の人は誰や？ 顔と名前の一致しない人がダンダン増えたな…」。

すでに「協和うとう会事務局」を卒業していた安嶋はデジカメとパソコンで画像処理をすることに楽しみを覚えるようになり、集合写真は四日市の山野順三さんにEメール送信してもらい、全員の名前を書き込んだ。新井さんはもとより「これは良い」との声に気を良くして以降続けるようになった。



良寛荘から朝もやのかかった瀬戸内海を望む



連吟「鐘之段」(左から 加藤・藤沢)



独鼓「笠之段」(加藤)



懇親会 堺・大阪グループ紹介





第44回 / 平成17年(2005)10月29・30日 / 名古屋市・浅井能舞台

## 能舞台とホテル宿泊の新スタイルできる

協和うとう会の会場探しの条件の基本は、舞台・見所・申し合わせ・懇親会が1個所で揃うことと、料金的に1万円台の半ばの負担で済むように、長年の事務局の工夫があった。ところが、これまで使用料が高くて使いづかった能舞台がいつでも手が届く所で見つかるようになったことと、一度能舞台で謡うと「たたみの上」とは気分的に全く違うこともあって、時代とともに会場探しのポイントにも変化が見られるようになった。一方では、舞台の上での正座の負担がより大きくなったが、新しい工夫も生まれて対応しているが……。

この浅井能舞台は、舞台・見所・控え室の使い勝手をはじめ、交通の便・宿舍との関係などいろいろな面で満足度が高く、「来年もできたら、ここでやろうよ…」との声が出た。

今回の宿泊は舞台から徒歩で移動する愛知厚生年金会館「ウェルシティなごや」利用となり、年金生活者ばかりを対象にする安嶋は、みなさんが優遇措置を受けるためには「厚生年金受給番号」も把握しておく必要があり、この方法について会館の窓口になっていた上森茂さんとメール交信している。



舞囃子「紅葉狩」(左から 岡田・三池・平尾・岡野)



独鼓「藤戸」  
(左から 加藤・水滝・磯部・瀬島)



独吟「芭蕉」(富岡)



素謡「八島」(前列左から 中村・岡田・平尾)



見所風景



懇親会  
(左から 富岡・但見・竹林・西村)



第45回 / 平成18年(2006)10月28・29日 / 名古屋市・浅井能舞台

## 好評浅井能舞台で連続開催、砧・山姥…

同じ舞台で二回目となると、会の準備をするにしても前回の使用でいろいろな使い勝手がわかったので気分的にも楽になるし、同じビルに持ち主夫婦が住んでおられるので便利に使用させていただいた。なお、今回の開催案内のEメール発信者は矢尾幸三さんになっており、前回の後、うとう会事務局は田辺博章さんが協和を退職したためバトンタッチしていた。

この回の番組編成にあたって、磯部さんとかなり頻繁にファックスの交信をした記録が残っている。しかしその甲斐があって、終わった翌日にこんなファクシミリが届いた。「いろいろお世話になりました。無事盛況に終わり、本当にありがとうございます」、そして体調が優れなかったので番組にも2日目は出演は控えてあったこと、熱を入れて地頭の稽古した素謡「砧」の録音がうまくいかなかったのもし録音していたら…とあった。私も録音はしておらず悔やまれたが、代わりに「砧」のを地頭謡う写真ほかで「砧に注いだ稽古熱」というタイトルをつけたミニアルバムを作って差し上げたら、「良い記念になった…」と喜ばれた。



素謡「砧」(前列左から木谷・富岡・西村)



素謡「屋島」(前列左から薮下・大森・八尾)



素謡「井筒」(前列左から渡辺・八尾)



独鼓「駒之段」(左から中里・岡田)



素謡「富士太鼓」  
(前列左から山野・上森・緑)



素謡「山姥」  
(前列左から鍛冶・平尾・中村)



第 46 回 / 平成 19 年 (2007) 10 月 27・28 日 / 静岡・ハートピア熱海

## 常連幹部複数の不参加で会の先行き心配も

7 月段階の磯部武夫さんとの番組編成に関わる Fax 交信から、この回の特徴的なことを拾ってみよう。まず磯部さんご自身が「欠席する」という。ご本人の健康問題か、との安嶋将の心配に対して「磯部家のおめでた」とわかり一安堵した。また、西村淳さんからの Fax には「うとう会の直前に陸士の同期生総会が高岡で開催され、小生は現在副代表幹事（来年は代表幹事）のため、連日の懇親会となりかなり疲れると思い、うとう会は欠席…」とあった。さらに富岡啓太郎さんがご自分の関係している東京の会が 2 日目ダブルため早退予定とあって、こんな様子を思い「常連の不参加」が多く近年にない雰囲気になりそうですね…と感想を送っている。加えて、「磯部さんが心配しておられる協和うとう会存続に現実的な局面を迎えているような気がしてなりません。まあ、一つの大きな踏ん張りどころですね…」とも綴っている。

しかし、熱海の地は言うなれば富士工場の“地元”である。協和発酵健保の熱海荘が近くにある庭続きのようなもの。高橋孝夫さんが久しぶりに参加されて独鼓「駒之段」「鐘之段」、連調「花月」をお元気に謡われた。



独吟「求塚」(岡田)



仕舞「巻絹」(西本)



独吟「七騎落」(濱田)



仕舞「松虫」(小原)



独吟「蟬丸」(水滝)



仕舞「雲雀山」(中村)



## 第 47 回 / 平成 20 年 (2008) 10 月 25・26 日 / 愛知・サンピア岡崎 新井純さん、浅井昇さんを偲んで「融」上演

協和うとう会設立からその後の発展過程を会長としてリードしてこられた新井純さんが平成 19 年 12 月 93 歳で、その新井さんとともに防府工場時代から謡曲の道を歩んでこられた浅井昇さんが、20 年 8 月 82 歳で逝去された。新井さんを偲ぶうとう会として編成していた番組には、浅井さんへの弔意も込められ、舞台では「融」が連吟・仕舞・素謡で演じられた。

懇親会の会場には新井さんを偲ぶ懐かしい写真が展示されて、大先輩のうとう会のみならず協和発酵初期の重要場面の新井さんの業績を知ることができた。

この回の番組編成は、磯部武夫さんが健康が優れないため、安嶋将がピンチヒッター担当することになった。これまでは磯部さんお手伝いで番組の原案が出来たところから磯部さんの指示にもとづいて校正・チェックのお手伝いをしてきたことが大いに役立った。とはいえ、実際の編成作業から関与したわけではないため、戸惑うことが多く、その都度富岡啓太郎さん、西村淳さんに尋ね、また宝生流のわからないことは岡田英明さんに E メール交信で教えていただいた。



連吟「融」宝生  
(前列左から 鍛治・中村・近藤・中里)



新井純さんを偲ぶ



素謡「蟬丸」観世  
(前列左から 濱田・水滝・但見)



素謡「女郎花」宝生  
(前列左から 鍛治・中里・近藤)



連吟「山姥」観世 (山家・上森)



見所風景



第 48 回 / 平成 21 年 (2009) 10 月 24・25 日 / 大阪市・井戸舞台

## 磯部邸最寄りの井戸舞台と年金施設利用

能舞台で演じ、ホテル宿泊…というスタイルを今回は大阪・磯部武夫さんのお宅に近い所で実現した。事前の磯部さんとの打合せで「会場について大変なご配慮をいただき本当に感謝しています。健康状態はペースメーカーの電池取替えの手術を一週間ほど入院して順調に終わりました。足腰の麻痺・痛みには今も苦しんでいます。以前のような歩行困難ではありませんが、足腰に力がなくヒョロヒョロ歩きで杖に頼りに歩く練習をしています。50メートル位転ばないように注意しています。番組案では大阪堺グループの「松虫」と四日市の「半部」の地頭になっていますが、二つは無理なので「半部」の方はあなたが交代してください。90歳になると想像以上に体力がなく無理したくありませんのでよろしく…。懇親会は両日とも欠席します」。

一日目の懇親・夕食は舞台主・井戸さんのご了解をいただいて、見所に長テーブルをおき近くの店から仕出し弁当を配達してもらい、ビール、銚子も並べて楽しく盛り上がった。ここまでは磯部さんにお付き合いいただいた。今回も遠く博多から参加された浅原方平さんから「体調により地謡は1曲のみで…」とFaxを受信している。



素謡「阿漕」全宝生  
(前列左から 近藤・中村)



素謡「玄象」全観世  
(前列左から 田辺・瀬島・富岡・山家)



素謡「賀茂」観世OB  
(前列左から 浅原・水滝・但見・濱田)



仕舞「敦盛」(中村)



素謡「花月」(前列左から 中里・加藤)



独鼓 太鼓「山姥」(近藤)



第49回 / 平成22年(2010)10月30・31日 / 名古屋・柴田舞台

## 久々の居囃子上演で“うとう会”の誇り示す

以前「一つの会社で、これだけ囃子が揃うところは珍しい…」とよく聞かされたが、近年は舞囃子、番囃子の上演もいつしか消えていた。今回は鳴り物陣(囃子演奏者)の発案で居囃子の上演が決まり、「船弁慶」の囃子方・謡い手が舞台いっぱいに演じた。

協とうとう会創設者の一人で参加者最年長の富岡啓太郎さんは、心に期すところあり仕舞「頼政」を舞台上で床几を使い大曲を舞った。

今回の参加者は、直前になって体調不良による欠席1となったが、坂本美枝子さん(土浦)・森山孝広さん(富士)・八木信宏さん(富士)の現役社員3人が初舞台を踏み、うれしい話題になった。

近年の傾向としてほぼ30人の参加規模になっているため、演目数も最盛期より少なくなって時間的にユッタリめの番組が組めるようになり、素謡は特に長いものを短縮するようにして、ほとんどは全曲を謡うようにしている。このため、「クリ・サシ・クセの良いところが抜けて面白くない…」といった声は聞かれなくなり、稽古も全曲通してシッカリするため深みを増した気がする。



連吟「松虫」(三池・木谷)



居囃子「船弁慶」(左から 岡田・山家・緑)  
(水滝・西本・安嶋・富岡)



素謡「藤戸」(前列左から 瀬島・山田・藤井)



連吟「羽衣」(前列左から 森山・八木) 初舞台



懇親会(初舞台 坂本)



番外独吟(大森)



連吟「敦盛」(前列左から 加藤・近藤)



第 50 回 / 平成 23 年 (2011) 10 月 29・30 日 / 静岡袋井・可睡齋

## 再度 名刹可睡齋で、50 周年の精進を謡う

20 周年を翌年に控えた第 19 回協和うとう会を、84 名の謡仲間の参加のもとにこの可睡齋で開いたのは 31 年前であった。第一日の夕食後、20 周年に向けた記念企画として座談会を二つ開いた。一つは「協和の謡の歴史を築いた」リーダーたちのもの、もう一つは「若手世話役の立場から」語り合ったもので、この全文は「20 周年記念誌」に記録されている。

今回の参加者は、29 名でうとう会初期のころの規模になってしまった。しかし、番組の充実度は素謡では上級の曲が多く、九番・準九番が割合多かった。囃子も居囃子始め独鼓が打たれた。また、仕舞では独創的な工夫も試みられて熱い研究成果が披露された。

懇親会では適度なアルコールが許されるが、すべて精進料理で、朝のお勤め、座禅の生活と謡曲があまり違和感のない二日間であった。



連吟「邯鄲」(左から西本・山家・瀬島・山田)



連吟「羽衣」(左から中里・柳澤・岡田・加藤)



仕舞「玉葛」(三池)



素謡「船弁慶」(前列左から坂本・鈴木・田辺・小林)



居囃子「小袖曾我」  
(左から岡田・山家・富岡)



素謡「玄象」(前列左から安嶋・小原・水滝・但見)

協和うとう会番組

平成十四年十一月二十三日(土) 四日(日)  
会場 大津市伝統芸能会館  
場所 大津市三井寺山内仁王門北  
四〇七五二五三三  
〇七五二五三三〇

第一日目

(午後一時開演) 時間厳守

素謡

(本社)  
吉野天人

シテ 北河 康之

ワキ 富田 萬尚

(四日市)  
鉄 輪

シテ 山野 順三

ワキ 緑 静雄 茂  
ワキツレ 上森

(富士)  
船 弁 慶

シテ 中里 宜資  
子 加藤 恵理

ワキ 矢尾 幸三 明  
ワキツレ 近藤

葵 上 独 吟

三池 公恵  
安島 将

蟬 丸 連 吟

田 村 仕 舞

田辺 博章  
西野 邦明  
岡野 博子  
加藤 恵理

船 弁 慶  
八 島  
葵 上

中村 信郎  
森田 英基  
木谷 美枝

(土浦)  
百 萬

子 大山 哲  
シテ 小林 誠

ワキ 大森 大陸

(堺)  
善 知 鳥

ツレ 山田 義之  
シテ 水滝 彰一

ワキ 竹林 実

花 月 独 鼓

玉 之 段 連 調

高橋 孝夫 三池 公恵  
磯部 武夫 山家 多喜男  
浅井 昇

鐘 之 段

近藤 宜資 明  
中里 良作  
大橋 平尾 孝学  
高田 高橋 孝夫  
三池 公恵 矢尾 幸三  
加藤 恵理

(全親世)  
三 井 寺

子 木谷 美枝  
シテ 浅井 昇

ワキ 西村 淳  
ワキツレ 浜田 紳一郎

(終了予定 十七時)



第二日目

(午前九時 開演)

素

謡

(四日市)

玄

象

師 上森 茂  
ツレ 木谷 芙美子  
シテ 山家 多喜男

ワキ 佐藤 恒治

(本社)

熊

野

子 八尾 和廣  
シテ 但見 靖啓

ワキ 藤田 良輔  
ツレ 藪下 尚夫

(大阪)

通小町

ツレ 浜田 紳一郎  
シテ 瀬島 常雄

ワキ 藤井 武夫

一

管

早

笛

村上 静夫

乱

西村 淳

雛

子

小袖曾我

中里 宜資  
矢尾 幸三

(小) 三池 公恵  
(笛) 高田 曜子

一

調

雲林院

西村 淳

磯部 武夫

(金宝生)

花

筐

シテ 中村 信郎  
ツレ 近藤 明

ワキ 平尾 学  
ツレ 大橋 良作

(終了予定十二時)

舞台への出・入は迅速にお願いします。  
会場は清潔にして下さい。

協和うとう会番組

平成十五年十一月十五日(土) 十六日(日)  
於三島グランドホテル  
静岡県三島市大宮町三ノ一八ノ三三

TEL 055・975・4300

(第一日)

十三時開演

(素謡)

忠 (土浦)

度

シテ 小林 誠

ワキ 鈴木 敏行

二人 (堀) 静

ツレ 山田 義之  
シテ 綱野 政美

ワキ 藤井 武夫

(独吟)

松 虫

西本 徳之

隅 田 川

高山 健一郎  
永山 正子

(連吟)

田 村

岡野 博子  
加藤 恵理

景 清

瀬島 常雄  
磯部 武夫  
水滝 彰一

(独鼓)

熊 野

ロンギ 三池 公恵 高橋 孝夫

(仕舞)

鶴 亀

岡野 博子

嵐 山

森田 英基

田 村

中村 信郎

殺 生 石

西本 徳之

笹 之 段

富岡啓太郎

藤 (全観世)

戸

シテ 新井 純

ワキ 富岡啓太郎

ツレ 浜田紳一郎

仕舞地謡  
平尾 高橋 大橋 観世 浅井 磯部 水滝  
竹林 大森 安嶋 田辺 磯部 瀬島 裁下

小原 大森 但見 藤田 八坪 田辺 佐藤 緑 山 磯部 上野 山家 藤 水滝 瀬島

俊 (宝生)

寛

シテ 中里 宜資  
ヤス大橋 良作  
ナリ近藤 明  
ワキ矢尾 幸三

(本社)

玄 象

師 八尾 和廣  
ツレ藪下 尚夫  
シテ藤田 良輔  
ワキ大森 大陸

(全観世)

砧

ツレ加藤弥生子  
シテ浅井 昇  
ワキ田辺 博章

(終演予定十八時半頃)

(第二日)

九時開演

(観世)

小 督

(素 謡)  
トモ安嶋 將  
ツレ小原 嘉人  
シテ大坪 一弥  
ワキ但見 靖啓

善知鳥 (四日市)

ツレ山野 順三  
シテ佐藤 恒治  
ワキ緑 静男

(連 吟)

田 村

竹林 実  
浜田紳一郎  
田村 直邦

雲林院

藤沢佐都子  
加藤弥生子

頼 政

山家多喜男  
上森 茂

熊 野

(独 吟)

安嶋 將

砧

(連 調)

田辺 博章

羽 衣

加藤 恵理  
高田 曜子  
三池 公恵  
大橋 良作  
中里 宜資  
近藤 明

藤井 竹林  
網野 山家  
藤田 浅井  
上森 山田

鈴木 八尾  
小本 浅井  
西山 大森  
山野 大森

平尾  
高橋  
矢尾

加藤 平尾  
永山 高橋  
高山 岡田  
村上 中村

佐藤 浜田  
緑安 安嶋  
上富 富岡  
山家 田辺

佐藤 山家  
安嶋 富岡  
水嶋 磯部  
浜田 瀬島



(一調)  
勸進帳 磯部 武夫 富岡啓太郎

(雜子)

春 栄  
シテ高橋孝夫 岡田 英明  
ワキ矢尾幸三 三池 公恵 村上 静男  
中里 平尾 高橋 大藤 近

清 経  
富岡啓太郎 平尾 学  
加藤弥生子  
浅井 磯部 水滝

(全宝生)  
通 小 町  
シテ平尾 学  
ワキ中村 信郎  
ツレ村上 静男

加藤 高山 永山 中里 矢野  
高山 岡田 大藤 近藤

附祝言

(終演予定十三時)

(第二日)

第四十三回

協和とう会番組

日時 平成十六年十一月六日(土) 七日(日)  
場所 倉敷 良寛荘

第一日 開始時間 (十三時)

素 謡

盛久 (四日市)

シテ 山家多喜男

ワキ 佐藤 恒治  
ワキツレ 上森 茂

草子洗 (富士)

王 加藤 恵理  
立 矢尾 幸三  
貫 近藤 明  
シテ 岡野 博子

ワキ 中里 宜資

通小町 (土浦)

ツレ 鈴木 敏行  
シテ 小林 誠

ワキ 西野 邦明

独 吟

駒之段  
琴之段  
鶴之段  
求 塚

鍛治 義延  
富岡啓太郎  
浜田紳一郎  
磯部 武夫

井筒 (全宝生)

シテ 平尾 学

ワキ 中村 信郎

鉄輪 (本社)

シテ 浅原 方平

ワキ 但見 靖啓  
ワキツレ 安嶋 將

鐘之段 連 吟

加藤弥生子  
藤沢佐都子

遊行柳

西本 徳之  
永富 正人

連

駒之段

調 平尾 学  
大橋 良作  
矢尾 幸三

加藤 恵理  
三池 公恵  
中里 宜資  
近藤 明

江口 (大阪・堺)

ツレ 網野 政美  
シテ 水淹 彰一

ワキ 瀬島 常雄

(終了予定時間十七時頃)

第二日

開始時間

(午前九時)

(本社)

忠度

シテ 藤田 良輔

ワキ 八尾 和廣

(富士)

芦刈

ツレ 加藤恵理  
シテ 中里 宜資

ワキ 矢尾 幸三

独 吟

紅葉狩

竹林 実

野宮

田辺 博章

俊寛

浅井 昇

玄象

安嶋 將

大原御幸

岡田 英明

(大阪・堺)

蟬丸

ツレ 藤井 武夫  
シテ 藤沢佐都子

ワキ 山田 義之

独 鼓

岡田 英明

八島

大橋 良作

笠之段

磯部 武夫

加藤弥生子

藤戸

大橋 良作

三池 公恵

(四日市)

小鍛冶

シテ 緑 静男

ワキ 上森 茂  
ワキツレ 山野 順三

仕 舞

敦盛

永富 正人

阿漕

西本 徳之

田村

岡野 博子

嵐山

中村 信郎

(全観世)

藤戸

シテ 西村 淳

ワキ 富岡啓太郎  
ワキツレ 安嶋 將

附祝言

(終了予定時間 十四時頃)



# 第四十四回協和うとう会番組

平成十七年十月二十九日〔土〕・三十日〔日〕  
於 名古屋市千種区今池 浅井能舞台

一日目

(開演 十三時)

素 謡

敦盛 (四日市)

シテ 山野 順三

ワキ 緑 静男

地頭 山家多喜男

江口 (本社)

ツレ 藪下 尚夫  
シテ 八尾 和廣

ワキ 大森 大陸

地頭 安嶋 将

小督 (富士)

ツレ 中里 宜資  
シテ 矢尾 幸三

ワキ 近藤 明

地頭 岡田 英明

独 吟

薪之段 鍛治 義延  
雨之段 西本 徳之  
忠 度 安嶋 将  
半 節 浜田 紳一郎  
芭蕉 富岡 啓太郎

善知鳥 (堺・大阪)

ツレ 山田 義之  
シテ 水滝 彰一

ワキ 藤井 武夫

地頭 磯部 武夫

葵上 (四日市)

ツレ 佐藤 恒治  
シテ 木谷 美枝

ワキ 山家多喜男

地頭 西村 淳

仕 舞

高 砂 中村 信郎  
笠之段 小原 嘉人  
松 風 西本 徳之

独 鼓

田 村 高橋 孝夫  
藤 戸 磯部 武夫  
中里 宜資  
加藤 弥生子

船弁慶 (観世O.B.)

子 竹林 実  
シテ 但見 靖啓

ワキ 小原 嘉人

地頭 富岡啓太郎

八島 (金宝生)

ツレ 中村 信郎  
シテ 岡田 英明

ワキ 平尾 学

地頭 高橋 孝夫

(終了予定 十八時頃)

二日目

(開演 九時)

清 (土浦)  
経

素 謡

ツレ 鈴木 敏行  
シテ 小林 誠

ワキ 西野 邦明

地頭 田辺 博章

松 (堺・大阪)  
風

連 調

ツレ 加藤 弥生子  
シテ 藤沢 佐都子

ワキ 富岡啓太郎

地頭 磯部 武夫

八 島

謡 高橋 孝夫  
平尾 学  
矢尾 幸三

鼓 加藤 忠理

三池 公恵  
中里 宜資  
近藤 明  
大橋 良作

仕 舞

遊行 柳  
天 鼓

西村 淳  
富岡啓太郎

舞 雜 子

紅葉狩

岡野 博子

岡田 英明  
三池 公恵

平尾 学

一 管  
獅子

西村 淳

素 謡

玉 (富士)  
葛

シテ 岡野 博子

ワキ 加藤 忠理

地頭 大橋 良作

景 (金観世)  
清

トモ 安嶋 将  
ツレ 瀬島 常雄  
シテ 磯部 武夫

ワキ 西村 淳

地頭 富岡啓太郎

附祝言

(終了予定 十四時頃)

第四十五回協和うとう会番組

平成十八年十月二十八日〔土〕二十九日〔日〕  
於名古屋市千種区今池 浅井能舞台

第一日

(開演 十三時)

素謡

本社親世  
屋島

ツレ敷下 尚夫  
シテ大森 大陸

ワキ藤田 良輔

地頭 西村 淳

富士宝生  
三山

ツレ加藤 恵理  
シテ岡野 博子

ワキ中里 宜資

地頭 平尾 学

独吟

放下僧  
鉄輪  
忠度  
歌占

浜田紳一郎  
西本 徳之  
近藤 明  
鍛治 義延

全親世  
砧

ツレ木谷 美枝  
シテ富岡啓太郎

ワキ西村 淳

地頭 磯部 武夫

連調

葵上

独鼓  
東北  
駒之段

加藤 恵理  
中里 宜資  
三池 公恵  
近藤 明  
加藤 恵理  
中里 宜資

本社親世  
井筒

シテ渡辺 尚子

ワキ八尾 和廣

地頭 安嶋 将

四日市親世  
富士太鼓

子山野 順三  
シテ上森 茂

ワキ緑 静男

地頭 山家多喜男

仕舞

松経  
政虫  
栖  
国

中村 信郎  
西本 徳之  
富岡啓太郎

大阪・堺親世  
玄象

師長山田 義之  
ツレ藤井 武夫  
シテ瀬島 常雄

ワキ水淹 彰一

地頭 磯部 武夫

(終了予定 十八時)



第二日

(開演 九時)

素謡

四日市観世  
野宮

シテ 木谷芙美枝

ワキ 佐藤 恒治

地頭 山家多喜男

土浦  
小督

トモ 西野 邦明  
ツレ 田辺 博章

シテ 小林 誠

ワキ 大森 大陸

地頭 富岡啓太郎

観世OB  
安達原

シテ 竹林 実

ワキ 大坪 一弥  
ワキツレ 八尾 和廣

地頭 富岡啓太郎

舞囃子

紅葉狩

岡野 博子

水滝 彰一  
三池 公恵

平尾 学

独吟

実盛  
江口

山家多喜男  
安嶋 将

全宝生  
山姥

ツレ 鍛冶義延  
シテ 平尾 学

ワキ 中村 信郎

地謡 岡田 英明

附祝言

(終了予定 十二時半)

# 第四十六回協和うとう会番組

平成十九年十月二十七日(土)・二十八日(日)  
於 熱海 ウェルハートピヤ熱海

第一日

素謡

(開演 十三時)

敦 (本社盛)

シテ 藤田 良輔

ワキ 藪下 尚夫

地頭 田辺

頼 (四日市政)

シテ 佐藤 恒治

ワキ 山家多喜男

地頭 安嶋

班 (土浦女)

シテ 鈴木 敏行

ワキ 小林 誠  
ワキツレ 田辺 博章

地頭 山家

独

吟

求 塚  
薪之段

岡田 英明  
田辺 博章

独

鼓

駒之段 高橋孝夫  
鐘之段 高橋孝夫

中里 宜資  
三池 公恵

巻 (OBグループ) ツレ

竹林 実  
シテ 小原 嘉人

ワキ 但見 靖啓

地頭 富岡

鉄 (富士宝生) 輪

シテ 中里 宜資

ワキ 矢尾 幸三  
ワキツレ 加藤 恵理

地頭 平尾

(終了予定 十七時十分頃)

第二日

(素謡)

(開演 九時)

蘆 (本社)  
刈

ツレ 渡辺 尚子

シテ 八尾 和廣

ワキ 大森 大陸

地頭 安嶋

通 (四日市)  
小町

ツレ 上森 茂

シテ 緑 静男

ワキ 山野 順三

地頭 山家

独

吟 七騎落

濱田 紳一郎

清 經 蟬丸

西本 徳之  
水淹 彰一

連

調

花月

高橋 孝夫  
平尾 学  
矢尾 幸三

近藤 明  
中里 宜資  
三池 公恵  
加藤 恵理

仕

舞

雲雀 山  
巻絹 キリ  
松虫 キリ

中村 信郎  
西本 徳之  
小原 嘉人

小 (全宝生)  
督

トモ 近藤 明  
ツレ 中村 信郎

シテ 鍛治 義延

ワキ 平尾 学

地頭 岡田

狸 (全観世)  
々々

シテ 安嶋 将

ワキ 田辺 博章

地頭 大森

(終了予定 十二時三十分頃)



新井純さんを偲んで

# 第四十七回 協和うとう会番組

平成二十年十月二十五日(土)・二十六日(日)  
愛知県・厚生年金健康福祉センターサンピア岡崎

第一日 開演 十三時

素謡

(本社)  
杜若

シテ 藤田 良輔

ワキ 八尾 和廣

地頭 安嶋 将

独吟

清経

坂井満里子

鉄輪

浜田紳一郎

三井寺

瀬島 常雄

鉢木

鍛治 義延

素謡

(土浦)

葵上

ツレ 小林 誠

シテ 田辺 博章

ワキ 鈴木 敏行

ワキツレ 大森 大陸

地頭 富岡啓太郎

連吟

(四日市)

山姥

山家多喜男

上森 茂

(全宝生)

融

中里 宜資

近藤 明

中村 信郎

岡田 英明  
平尾 學

仕舞

羽衣

三池 公恵

融

西本 徳之

素謡

(四日市)

鶺鴒

シテ 上森 茂

ワキ 緑 静男

地頭 山家多喜男

ワキツレ 山野 順三

(全宝生)

雨月

ツレ 鍛治 義延

シテ 中村 信郎

ワキ 近藤 明

地頭 岡田 英明

(終了予定 十八時頃)

第二日 開演 九時

素 謡

(宝生)

女郎花

シテ中里 宜資

ワキ近藤 明

地頭平尾 學

ワキツレ鍛治 義延

(觀世OB)

蟬 丸

ツレ濱田紳一郎

シテ水淹 彰一

ワキ但見 靖啓

地頭富岡啓太郎

独 吟

俊成忠度

平尾 學

弱法師

西本 徳之

隅田川

木谷芙美枝

遊行柳

岡田 英明

素 謡

(本社)

通小町

ツレ渡辺 尚子

シテ大森 大陸

ワキ數下 尚夫

地頭安嶋 将

仕 舞

蘆 刈

キリ

中村 信郎

独 鼓

駒之段

三池 公恵

松 虫

中里 宜資

山 姥

太鼓

近藤 明

一 管

真之音取

平尾 學

素 謡

(全觀世)

融

シテ山家多喜男

ワキ安嶋

将

地頭富岡啓太郎

(終了予定 十五時頃)

第四十八回 協和うとう会番組

平成二十一年十月二十四日(土)・二十五日(日)  
大阪市阿倍野区文の里三一・一六一・一七・井戸舞台

第一日 開演 十三時

素謡

後ツレ浅原 方平  
ツレ水淹 彰一

(観世OB)  
賀 茂

シテ但見 靖啓

ワキ濱田紳一郎

地頭富岡啓太郎

独吟

實盛

謡

西本 徳之

草子洗小町

水淹 彰一

蟻通

平尾 學

花筐

狂

山家多喜男

素謡

(本社)

浮舟

シテ渡辺 尚子

ワキ安嶋

将

地頭藪下 尚夫

(四日市)

半節

シテ木谷英美枝

ワキ佐藤

恒治

地頭安嶋

将

仕舞

阿漕

キリ

西本 徳之

素謡

(堺・大阪)

松虫

シテ瀬島 常雄

ワキ山田

義之

地頭磯部

武夫

(全宝生)

阿漕

シテ近藤

明

ワキ中村

信郎

地頭鍛冶

義延

(終了予定 十七時頃)



第二日 開演 九時

素謡

(本社)

ツレ八尾 和廣

養老

シテ藪下 尚夫

ワキ大森 大陸

地頭安嶋 将

(宝生富士)

花月

シテ中里 宜資

ワキ加藤 恵理

地頭平尾 學

独吟

通小町

三池 公恵

松風

濱田紳一郎

薪之段

浅原 方平

砧

岡田 英明

素謡

(四日市)

清経

ツレ上森辺 茂

シテ緑

静男

ワキ山野 順三

地頭山家多喜男

仕舞

敦盛

クセ

中村 信郎

狸々

三池 公恵

素謡

(土浦)

百萬

子方小林 誠

シテ鈴木 敏行

ワキ田辺 博章

地頭富岡啓太郎

独鼓

天鼓

中里 宜資

花筐

三池 公恵

山姥

太鼓

近藤 明

一管

獅子

平尾 學

素謡

(金観世)

玄象

師長田辺 博章  
ツレ瀬島 常雄

シテ富岡啓太郎

ワキ山家多喜男

地頭磯部 武夫

附祝言

(終了予定 十五時頃)

第四十九回 協和うとう会番組

平成二十二年十月三十日(土)・三十一日(日)  
柴田舞台・名古屋市中種区本山町一―三―

第一日 開演 十三時

素謡

(本社)

シテ藤田 良輔

ワキ渡辺 尚子

地頭安嶋 将

(四日市)

ツレ上森 茂

放下僧

シテ山野 順三

ワキ緑 静男

地頭山家多喜男

連吟

羽衣

森山 孝広  
八木 信宏

独吟

千手  
キリ

田辺 博章

葵上

藪下 尚夫

蘆刈

笠之段

濱田紳一郎

連吟

敦盛

シテ加藤 恵理  
ワキ近藤 明

素謡

(堺・大阪)

藤戸

シテ瀬島 常雄

ワキ山田 義之

地頭水淹 彰一

仕舞

ワキツレ藤井 武夫

蟬丸

小原 嘉人

歌占  
キリ

西本 徳之

素謡

(四日市)

ツレ佐藤 恒治

花筐

シテ木谷芙美枝

ワキ山家多喜男

地頭富岡啓太郎

ワキツレ西本 徳之

(全宝生)

ツレ近藤 明

山姥

シテ中里 宜資

ワキ平尾 學

地頭岡田 英明

(終了予定 十七時十分頃)

第二日 開演 九時

素謡

(観世OB)

ツレ但見靖啓

熊野

シテ小原 嘉人

ワキ水淹 彰一

地頭富岡啓太郎

連吟

松虫

シテ三池 公恵  
ワキ木谷芙美枝

独吟

実盛  
キリ

山家多喜男

金札

平尾 學

仕舞

鶴亀

キリ

三池 公恵

草紙洗

キリ

中村 信郎

頼政

富岡啓太郎

素謡

(全宝生)

ツレ平尾 學

富士太鼓

シテ近藤 明

ワキ中村信郎

地頭岡田 英明

独鼓

杜若

キリ

三池 公恵

岡田 英明

居雛子

船弁慶

サシ・クセ

大鼓 岡田 英明  
小鼓 山家多喜男

笛 緑 静男

地

安嶋 将 水淹 彰一

田辺 博章 富岡啓太郎 西本 徳之

素謡

(土浦)

子方坂本美枝子

三井寺

シテ鈴木 敏行

ワキ小林 誠

地頭富岡啓太郎

ワキツレ田辺 博章

(本社)

紅葉狩

シテ八尾 和廣

ワキ大森 大陸

地頭安嶋 将

ワキツレ藪下 尚夫

附祝言

(終了予定 十四時頃)

# 協和とうとう会五十周年記念大会番組

平成二十三年十月二十九日(土)・三十日(日)  
静岡県袋井市久能・可睡齋(かすいさい)

第一日 開演 十三時

連吟

邯鄲  
(全観世)

素 謡  
シテ瀬島 常雄

地頭山家多喜男

杜 若

(本社)

連吟

羽衣

素 謡

シテ柳澤 徳雄  
ワキ岡田 英明

地頭安嶋 将

七騎落  
(四日市)

子方木谷芙美枝  
義實山野 順三  
頼朝緑 静男

シテ佐藤 恒治  
ワキ上森 茂

地頭山家多喜男

仕舞

玉 葛

キリ

三池 公恵

素 謡

弱法師

(堺・大阪)

シテ瀬島 常雄

ワキ山田 義之

地頭水淹 彰一

子方坂本美枝子

シテ鈴木 敏行

ワキ田辺 博章

地頭富岡啓太郎

船弁慶  
(土浦)

独 鼓

ワキツレ小林 誠

海 士

地富岡啓太郎 上森 茂  
玉之段 山家多喜男

素 謡

藤 戸

(全宝生)

シテ中里 宜資

ワキ鍛治 義延

地頭岡田 英明

(終了予定 十六時五十分頃)



第二日 開演 九時

素 謡

井 筒

(全宝生)

シテ加藤 會理

ワキ岡田 英明

地頭鍛治 義延

班 女

(本社)

シテ渡辺 尚子

ワキ藪下 尚夫

地頭安嶋 将

仕 舞

百 萬

笹之段

小原 嘉人

海 士

玉之段

西本 徳之

連 吟

經 政

シテ森山 孝広  
ワキ鍛治 義延

居 離 子

小袖曾我

キリ

大鼓 岡田 英明  
小鼓 山家多喜男

笛 富岡啓太郎

(全社)

地 中里宜資 鍛治義延

独 吟

猩 々

鍛治 義延

近江八景

富岡啓太郎

素 謡

ツレ木谷芙美枝

シテ山家多喜男

ワキ西本 徳之

地頭佐藤 恒治

山 姥

(四日市)

独 鼓

地 岡田 英明

三池 公恵

班 女

クセ

素 謡

師長安嶋 将

ツレ小原 嘉人

シテ水淹 彰一

ワキ但見 靖啓

地頭富岡啓太郎

玄 象

(観世OB)

附祝言

(終了予定 十二時三十五分頃)

# … 協和うとう会の足跡 …

| 会 名           | 期 日          | 会 場         | 参加 |
|---------------|--------------|-------------|----|
| 東部合同謡会(第 1 回) | S35.7.17     | 健保・熱海荘      | 21 |
| 東部合同謡会(第 2 回) | S36.8.20     | 修善寺・あさば旅館   | 17 |
| 第 3 回うとう会     | S37.6.17     | 健保・熱海荘      | 25 |
| 第 4 回うとう会     | S38.6.23     | 健保・熱海荘      | 25 |
| 第 5 回うとう会     | S40.10.31    | 健保・熱海荘      | 35 |
| 第 6 回うとう会     | S41.11.20    | 熱海・つるやホテル   | 39 |
| 第 7 回うとう会     | S43.10.20    | 四日市倉庫・湯ノ山荘  | 28 |
| 第 8 回うとう会     | S44.11.16    | 協和・網代荘      | 35 |
| 第 9 回うとう会     | S45.10.18    | 三島・佐野別邸     | 50 |
| 第 10 回うとう会    | S46.10.24    | 浜松・西遠荘      | 60 |
| 第 11 回うとう会    | S47.9.17     | 三島玉沢・妙法華寺   | 72 |
| 第 12 回うとう会    | S48.9.15-16  | 浜松・奥山半僧坊    | 64 |
| 第 13 回うとう会    | S49.10.19-20 | 浜松・館山寺荘     | 74 |
| 第 14 回うとう会    | S50.10.18-19 | 大阪吹田・山手会館   | 84 |
| 第 15 回うとう会    | S51.11.6-7   | 三重湯の山・希望荘   | 90 |
| 第 16 回うとう会    | S52.11.5-6   | 三井寺・法泉院     | 87 |
| 第 17 回うとう会    | S53.11.4-5   | 三重湯の山・希望荘   | 81 |
| 第 18 回うとう会    | S54.10.20-21 | 竜野市・赤とんぼ荘   | 77 |
| 第 19 回うとう会    | S55.11.1-2   | 静岡袋井・可睡斎    | 84 |
| 第 20 回うとう会    | S56.11.7-8   | 東京東北沢・清風クラブ | 96 |
| 第 21 回うとう会    | S57.10.16-17 | 滋賀・多賀大社参集殿  | 70 |
| 第 22 回うとう会    | S58.11.5-6   | 袋井・醍醐荘      | 80 |
| 第 23 回うとう会    | S59.11.3-4   | 熱海・岩間荘      | 73 |
| 第 24 回うとう会    | S60.11.2-3   | 神戸・須磨荘      | 60 |
| 第 25 回うとう会    | S61.11.1-2   | 滋賀長浜・豊公荘    | 49 |
| 第 26 回うとう会    | S62.11.7-8   | 兵庫相生・あいおい荘  | 60 |
| 第 27 回うとう会    | S63.11.5-6   | 三重湯の山・希望荘   | 69 |
| 第 28 回うとう会    | H01.11.4-5   | 神奈川大和・六瓢能舞台 | 90 |
| 第 29 回うとう会    | H02.11.10-11 | 奈良・薬師寺      | 80 |
| 第 30 回うとう会    | H03.11.9-10  | 山口防府・渡辺舞台   | 74 |

|          |              |                |    |
|----------|--------------|----------------|----|
| 第31回うとう会 | H04.11.7-8   | 愛知知立・弘法山遍照院    | 64 |
| 第32回うとう会 | H05.11.13-14 | 三重鈴鹿・椿大社       | 47 |
| 第33回うとう会 | H06.11.12-13 | 京都亀岡・大本本部春陽殿   | 56 |
| 第34回うとう会 | H07.11.11-12 | 岐阜養老・グリーンハイツ養老 | 51 |
| 第35回うとう会 | H08.11.16-17 | 三重長島・ハートピア長島   | 49 |
| 第36回うとう会 | H09.11.15-16 | 愛知蒲郡・サピリア三河湾   | 40 |
| 第37回うとう会 | H10.11.21-22 | 滋賀大津・滋賀青年会館    | 41 |
| 第38回うとう会 | H11.11.13-14 | 静岡藤枝・藤枝インテラス   | 45 |
| 第39回うとう会 | H12.11.18-19 | 京都京田辺・休暇センター   | 36 |
| 第40回うとう会 | H13.11.23-24 | 神奈川大和・六瓢能舞台    | 51 |
| 第41回うとう会 | H14.11.23-24 | 滋賀大津・伝統芸能会館    | 36 |
| 第42回うとう会 | H15.11.15-16 | 三島・グランドホテル     | 42 |
| 第43回うとう会 | H16.11.6-7   | 倉敷玉島・国民宿舎良寛荘   | 33 |
| 第44回うとう会 | H17.10.29-30 | 名古屋・浅井舞台       | 37 |
| 第45回うとう会 | H18.10.28-29 | 名古屋・浅井舞台       | 32 |
| 第46回うとう会 | H19.10.27-28 | 熱海・ウェルハート熱海    | 30 |
| 第47回うとう会 | H20.10.25-26 | 愛知・サピリア岡崎      | 28 |
| 第48回うとう会 | H21.10.24-25 | 大阪・井戸舞台        | 32 |
| 第49回うとう会 | H22.10.30-31 | 名古屋・柴田舞台       | 33 |
| 第50回うとう会 | H23.10.29-30 | 静岡袋井・可睡斎       | 29 |



## 協和うとう会

# 二〇周年を祝して

協和醗酵工業(株) 会長 加藤辨三郎

正直のところ驚いた。はやくも協和うとう会が創立二〇周年を迎えようとは。いや、早いばかりではない。任意に発想され、完全に自主運営され、しかも二〇年続き、それどころか年年歳歳人員的にも質的にも向上している同好会は、少なくとも当社にはほかにない。

それは、新井会長をはじめ、世話人諸氏の熱意と努力に負うところ最も大であるが、同時に、会員諸君の深い理解と趣味の豊かさによること、いうまでもない。私は、諸君のたゆみなき精進に対し心から敬意を表する。

たしか二年くらい前になろうか、本社でうたいの会が開かれたことがある。その時、私は家内と共に拝聴した。二人とも、諸君のうたいのすばらしさに舌を巻いてしまった。水原君その他リーダー格の人は、本職に少しも劣るところはないと思った。

また、別の機会に、私は、新井会長の仕舞を拝見したことがある。その時も、あの理論家にして、この芸あるとはと、ほとほと感心したものだ。今でも眼に見えるようである。

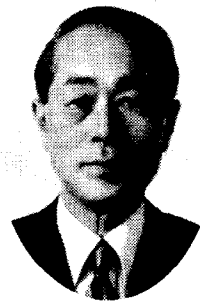
実は、私も、若い頃、数年稽古したことがある。仕舞も

二、三番は習った。それにも拘らず、肝心の「うとう会」には、全く失礼してしまい申し訳ない。ただ、理解だけは十分持っているつもりである。だから、うとう会が二〇周年を迎えたことはもちろん嬉しいが、それとともに、その実力の充実していることを、一層喜ぶものである。

しかも、その二〇周年記念会を、清風クラブで開いてくれるとは、なんと有難いことか。諸君もご承知であろうがあの場所こそ、協和醗酵発祥の地なのである。さればこそ会社創立三〇周年の記念事業の一つとして、そこに清風クラブを建立したのである。そのめでたい場所で、うとう会の二〇周年記念会を開いてくれるのだ。これを喜ばないでいられようか。私も、他に緊急用件の発生しない限り必ず参上して喜びを共にしたい。

そして、私は、うとう会が今後ますます盛んになることを願ってやまない。ことに、私は、友愛会々員もふるってこの会に参加せらんことをおすすめしたい。諸君の長寿と健康を願うことでもあるが、同時に、この会は最もよい親睦機関であるからである。最後に、協和醗酵と共にこのうとう会の発展を、重ねて願って祝辞とする。





## うとう会のあゆみ

協和うとう会会長

新井 純

昭和三十五年七月十七日、本社、東研、富士観宝合同誼会が熱海荘で開催されました。

観世六名、宝生十五名。

前日夕刻集合して、食事もそこそこに、翌日の本番にそなえ、夜半まで稽古に励みました。怪盗に、あり金を残らず持ち去られるのも知らず、大小鼓の調子合わせに夢中になっていたのは、忘れられない思い出です。

第二回は修善寺のあさば旅館の舞台を借りました。この時から「うとう会」と称することになりました。本社に磯部さん、東研に水原さん、富士に高橋さんという玄人以上の、しかも熱心この上ない方達があってこそ、うとう会が芽を吹いたのです。

それよりほとんど毎年、熱海荘で続けられました。

熱海つるや旅館での第六回には、勧誘のかいあって、初めて、四日市工場より大勢の参加があり、また、東京よりご夫人方も来演され、四十名と賑やかでした。

第七回は四日市の皆さんのお骨折りで、四日市倉庫さんの寮をお借りしました。堺工場よりの参加も得られました。それより数回は、網代、三島、浜松と静岡県下で催されましたが、人数の増加に応ずるため、土曜日午後と、日曜日

早朝より夕方までの二日間にわたる会になったのは第十二回からです。昭和四十八年九月でしたが、私は少し調子が悪くて休みました。

第十三、十四回も続けて私は休みました。まことに相すまぬことと思っています。

実はその第十四回が大阪で開かれ、防府・門司・宇部の参加あり、八十名を超える、名実ともに全国大会となったのです。

その後、湯の山、三井寺、湯の山、竜野、袋井と十一月はじめの土、日曜のうとう会が百名になんなんとする盛大さで続いております。

安島幹事らの尽力で、会社からの御後援も得られて、参加がしやすくなりました。

幹事の皆さんのお世話は大変です。会場、宿所の手配、番組の編成、食事の心配などなど、感謝のきわみです。

本当に有難うございます。

今年は第二十回を迎えます。長かった様にもあり、また、もうそんなに！とも感じます。いつまでも「うとう会」が続き、平素遠くにいるお互いの交驩こうかんをたすけ、また、OBと現役との懐しい再会の機となることを念じております。

## ごあいさつ

協和とう会会長 新井 純



協和とう会のはじまりは、昭和三十五年でしたから今年で満三十二年になります。

十数名で始まったこの会が、今や数十名の大勢になって、毎年休みなく開かれます。よくも続いてきたものと思われま

す。  
幹事の方々の一方ならぬご苦勞と厚く御礼を申し上げます。

二十周年記念誌の発行後の十年間に、私は五回しか参加しませんでした。申し訳ないことです。

特に第三十回は私にとって因縁浅からぬ、防府で催されたのに参加せず、まことに残念に思っています。

現役、OBの同好の士が全国から相集って、二日間にわたり謡い、舞い、はやす。それが三十回を越すとは……。なかなか

が大変なことです。

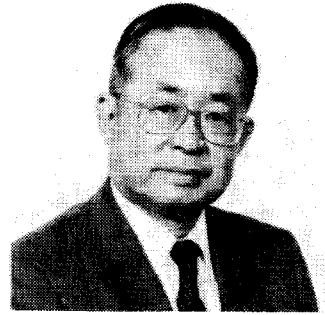
幹事のお骨折りでそれがなされているのです。

繰り返し、ご苦勞に御礼を申し上げます。

ご精進の甲斐あって、師範を得られた方もおられるようで、まことにご同慶の至りです。ますます、会を引っ張ってください。

番組を見ると、存じ上げぬ方が多数おられます。若返ってきたのですね。これで会がますます長く続くと思われ、大変うれしいことです。どうぞ、もりたててください。

最後に、何かとご援助をいただいている会社に対し、まことに有難く厚く御礼申し上げます。



## 協和とう会 三十周年を祝して

協和発酵工業(株)社長 中村寛之助

協和とう会が三十周年を迎え、心からお祝申し上げます。

この会が三十年も続けられたことは、まずこの会を育ててこられた新井会長、観世の磯部さん、富岡さん、宝生の高橋さん、水原さんら関係者の熱意とご努力の賜で、あらためてこれらの方々に感謝と敬意を表します。

昨年八月、前社長が急逝され、私が後任の社長に就任しました。就任した日に新聞記者の新社長インタビューがありました。あらかじめ私の趣味はゴルフということになっていましたが、記者の方々から、今どきゴルフは趣味に入らない、何かほかはないか、と問い詰められました。私は「強いてあげれば謡曲ぐらいか

な」と口にしてしまいました。翌朝、私の謡曲は天下に公表されることとなりました。

私の謡の歴史は中断の歴史でした。始めたのは協和発酵に入社して間もない昭和三十年頃でした。当時、本社は日比谷の第一生命ビルにありました。第一生命に教えにいられていた宝生流の三川泉先生に入門しました。その後、稽古は中断してしまいましたが、家内が私と同じ宝生流の謡をやっていたので、ときどき共に謡ったり、能を見たりしていました。

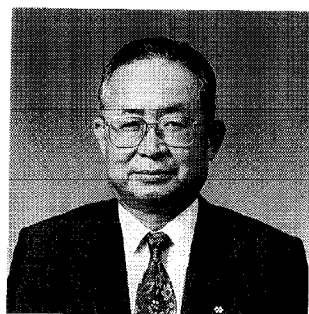
記録によると、私は協和とう会の第九、十、十一回に参加しています。昭和四十五年頃のことです。水原先生の本社宝生会に加えていただいたのです。これ

もやがて中断してしまいました。

正式に謡を再開したのは、昨年の一月初めでした。リタイア後の生活に備えて謡を始めました。昔から面識のあった関西・宝生流の広島克栄先生に入門しました。現在も時間の余裕はありませんが、今度中断せず続けようと月に一、二回の稽古を出社前にこなしています。

今年に入って、七月二十五、二十六日両日、東京水道橋の宝生能楽堂で広島先の大会がありました。私は「翁」のシテ謡い、家内は初めての能で「玉葛」を舞いました。番組を旧師の水原さんにお送りしました。さっそくに、私が宝生を再開したこと、私の家内が能を舞うことに驚き入るとともに、大変嬉しく思った旨のお便りをいただきました。そして今後継続して稽古するように、私への激励もありました。

最後に、協和とう会が今後ますます発展するようお祈りいたします。また、私自身、とう会の皆様とご一緒できる日を楽しみにしています。



## うとう会四十周年を祝して

中村 寛之助

うとう会は、発足後四十年を迎えました。まことにおめでとうございます。

何といっても謡の同好会を四十年も続けてこれたことは立派なことです。これは会員の皆様の熱意と幹事の方々のご努力の賜物です。心からお祝い申し上げます。

うとう会の名簿や、記念誌を拝見しますと会員の中には既に亡くなった方や現在、病いの床についておられる方も見受けられます。

会員は全事業場にわたり、またご家族の方も沢山いらっしやいます。家族の方は各事業場で、社員と一緒に頑張って謡の稽古を続けてこられました。謡を通して

同好の志がつながり相互の交流が深まりました。うとう会は、協和の中に趣味で結ばれた新しい人の輪を作りました。

私自身の体験ですが、最近、うとう会の友人の家に招かれた時のことです。

友人は「あなたと一緒に謡をうたったテープがある。一緒にテープを聞きましょうか。」と言われました。二十数年前に友人がシテをやり、私がワキを謡った時のテープでした。当時の懐かしい想い出がよみがえり感動しました。

うとう会の会員の中には謡だけでなく、仕舞を立派に舞われる方や、笛や太鼓・小鼓をよく演じられる方もいらっしやいます。また、先輩の中にはプロ並みの実力を持ち、能を何曲も舞われた方もおられました。

私はうとう会で、謡曲について何曲かの出演を通じていろいろなことを勉強させていただきました。

私は協和に入社してから宝生流の謡を始め、最近まで続けてきましたが、現在は、足の具合が悪く、謡は中断しています。しかしこれからは舞台で謡や仕舞いは出来なくても、専ら能楽堂に通って、能を鑑賞しようと思っています。何といっても、能は日本の代表的な古典芸術です。

今まで謡を続けてきたお陰で、能についての知識は多少は持つことができました。能が醸し出す世界を、一般の人よりはよく理解し、堪能することができると思っています。

能を通して、日本の古典芸術を勉強したいと思っています。昨今です。

うとう会の今後のご発展と会員の皆様のご精進をお祈りいたします。

(平成十四年三月)

《協和発酵工業㈱ 相談役》



## 協和うとう会第20回記念座談会・その一

# 息長く、さらに発展へ励もう

### 協和の謡の歴史を築いた立場から

協和うとう会——「うとう」は、「謡う」であり「打とう」であり、曲名「善知鳥」にもかかっている。年一回の会を重ねて今年は第20回。社内の同好の士による全くの自主運営で二十年。今では協和醗酵はもとより、広く協和関係者の修業の成果発表の場として、また親睦・融和の集いとして大きな会合となっている。この「協和うとう会」の産婆役・育て役をつとめてこられた方々、そしてこの会を次の世代にも発展させていく方々に、それぞれの立場で大いに語っていただいた。△第19回協和うとう会（五十五年十一月・静岡県袋井市・秋葉本殿可睡斎）で収録▽

#### 第一回は35年、熱海荘で

**司会** いつもですとあすのために地合せや、音合せでにぎやかな夕食後のひと時ですが、本日は、うとう会誕生のころのお話をうかがいたいと思います、いうなればうとう会の産婆役、育ての親、そして協和醗酵の謡の歴史をつくってこられた方々にお集まりいただきました。

**新井会長**、さっそくですがうとう会の発足は何年でしたのでしょうか。

**新井** 来年は第二十回になるんだが実は二〇周年ではないんです。第一回は昭和三十五年七月十七日に熱海荘で開きましたから、満二十年は今年になるんだが、間がぬけたので第二十回が来年になるんです。

最初はうとう会という名前はなく

て、観宝合同ということで、水原一瓢さんと高橋孝夫さんが企んだことだと思えますよ。

私は、三十四年に防府工場から本社に転勤になり製造部長をしておりましたが、三十五年七月初めに日本酒類との合併問題で大阪を経て九州・鹿児島まで出張したことがあるんです。その帰りに熱海に途中下車して参加したんです。これは日記に書いてあることだからまちがいありません。（笑）

#### 富士は宝生の天下のころ

**司会** そのころの各事業場の謡の活動状況はいかがでしたか。

**高橋** 私は富士工場におりまして女のお弟子さんを十数人と男のお弟子さん一人二人をかかえて宝生の天

#### 出席者（発言順）

新井 純 （本社・観世）

磯部 武夫 （元大阪支社・観世）

高橋 孝夫 （元富士工場・宝生）

西村 淳 （本社・観世）

富岡 啓太郎 （東京支社・観世）

水原 一瓢 （元本社・宝生）

#### 司会

安島 将 （本社・観世）

#### まとめ

浅井 勝 （富士工場・観世）

下でした。観世は大坪さんお一人だったと思いますよ。

そんなころあの悪名高き箱根会談があったんです。一瓢さんと磯部さんといっしょになって、夕方謡をやるうとう会のことになって、水原さんが太鼓、磯部さんが鼓を打って、私に鶴亀をうたえというんでうたたんです。ところが、お前のうたいじゃあ太鼓も打てない、鼓も打てないといわれましてね。私は一念発起して……そんなことがきっかけでこのうとう会がはじまったのです。（磯部「あれは組合大会だったと思います」）



「……と日記に書いてある」(新井)。左から新井会長・磯部さん・高橋さん

**水原** 研究所では、阿部主任研究員、板垣君、鮫ちゃんもおったかな、五人ぐらいでやっておりました。古い人はご存知だと思いますが昭和三十三年、丹沢で三十メートル落ちて三十五年ごろといったらまだ足がおかしかったころです。

**司会** 新井さん、本社の状況は？

**新井** 本社には何もありません。私も転勤早々でしたから。防府は盛んでしたよ。男女あわせて二十数人はいましたね。

### 「観・宝合同でやろう」

**司会** 宝生の盛んな富士にあつて、

富岡さん観世はどうでしたか。

**富岡** 西村さんと二十六年に富士工場に入社したころは、高橋門下の宝生が大勢いましたね。観世は西村さんと二人でした。私も最初はすぐ転勤で防府にいき、私は二十九年に富士にもどり、三十二年に大坪さんが、西村さんも防府からもどられて、観世が三人になった。そのころ磯部さんが大阪から出張でこられて、水明荘で話したことがあるんです。大西師の会で初めてシテを舞った磯部さんが、太夫の気持だなどと話されてね。水原さんの話も出て、それじゃ観宝合同でやろうよということになって、三十三年にやったことがあるんです。ですから第一回の予備的な会合がその前にあったんですね。

**司会** 新井さんはさきほど、本社には何もなかったといわれましたがそのころ磯部さんは本社にいらっしやったのですか。

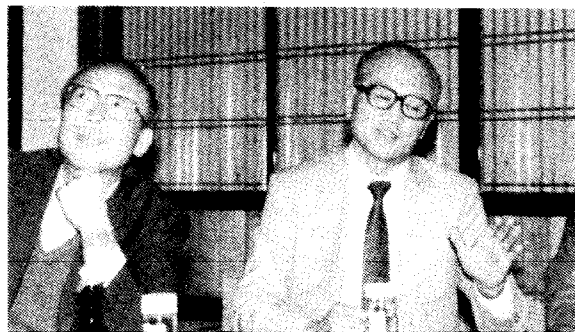
**磯部** 同じくらいでしょう。

**新井** 何年に本社にこられました。

**磯部** 三十四年十月でした。

**新井** それなら僕の方が少し早いね。

**磯部** そのころ堺はずいぶん盛んだったんです。当時、松田さん、本山さん、星野さんなんかいて、大



「丹沢で30メートル落ちて……」(水原)。左から富岡さん・水原さん

阪から、長沢常務、前壁課長、亡くなった岡崎課長、私と四人でよく堺にうたいに行ったことがあります。そんな堺の雰囲気をもつ我々が西方の代表として関東の方々と、ワサワサとやって今のような話につながったんです。

### 盗難のおまけつき

**司会** で、いよいよ第一回のうとう会の発足となるのですが、幹事役などは？

**水原** 私のところに昔の番組から經理の伝票まで全部あるんですが、十五回ぐらいまでは東京と大阪の真

中ということとで富士の高橋さんが、宿の世話から会計の世話をされ、私が番組の作成、写真の撮影などやっておりました。

当時の写真は、たいへんていねいでね。全部各事業場にまわして希望をとって、正の字を書いて、焼増しましたんです。しかし、それもくたびれちゃいましたね。その後は写っている人だけパッパッと焼いて送るようになっていました。これが十二回ぐらいからだと思っています。

**磯部** 初回は、ちょうど熱海荘が協和醗酵のものになった年なんで、どこでやろうかといったときに、熱海荘を初めて使おうじゃないかとなったわけです。

**司会** そうしますと第一回の構成は、富士、本社、東研の三事業場だったのですか。

**高橋** そうです。

**司会** 案内状などは……。

**高橋** 謄写刷りでした。私はそれを十年ぐらいやりましたよ。

**西村** 防府がテープ参加しませんでしたか。

**高橋** あれは、二回目ぐらいだったと思いますよ。

**司会** 何人ぐらいの参加だったのでしょうか？

富岡 んー、観世が新井さん、西村さんと大坪さん磯部さんと私の五人かな。宝生が高橋さん、水原さんと……当日参加の富士の女性といった構成で……。

高橋 富士の当日参加を加えると二十人ぐらいいたかなあ。

磯部 お茶の人も来てくれたなあ。

西村 二十人もいたかなあ。

司会 多い方がいいんで記録には二十人としておきましょう。(笑)  
ところで、今のようでなく、少数でしかも謡の虫が集まったのですから、会の運営などは、そう苦労もなかったと思うのですが……。

高橋 そう、特にはありませんね。

西村 それは盗難防止ですよ(笑)  
高橋 それは、あとからいわれたことで、何も最初から盗まれることなんか考えてもいませんでしたからね。

#### 盗難事件の、一部始終

司会 第一回の時に盗難があったのですか。(一同で一回目だ、いやその前だ、と話が混乱、記録不能)  
高橋 これだけ年月がたつと記憶もあやしくなるなあ。

新井 あやしくもないの「三十五年七月十六日熱海荘に泊る、カッコ盗



熱海荘での第5回うとう会で(40年)  
左から命尾先生・富岡さん・高橋さん・筆者

## うとう会と私の師

——命尾 静子 先生

望 月 美 江

命尾先生が、きびしい能の世界宝生流六百年の伝統を破って、女性で初めて道成寺を舞われたのは昭和二十七年の春と思いました。江戸時代徳川家に仕えた名門、宝生流命尾家を継いで欲しいと申し入れられ、その襲名披露の能でございました。大変な大事業だったと思います。

当時先生は三島の自宅はもちろん、東京、藤沢、熱海とけい古をしておられたそうですが、そのころから二、三年後だったでしょうか、高橋様や、富岡様が、小鼓や大鼓のけい古にいらして協和醗酵とのご縁になり、またまたそのあとの方から私も弟子入らせていただきました。

「能は精神で舞うもの、修業をしてひたすらに自分の芸をみがくだけ、舞は孤独なものです。」と先生はいつておられました。

それからあと、昭和三十何年だったでしょう、熱海荘で第一回うとう会が生れたのは。

お忙しい先生も、その会ごとに応援してくださいました。謡の地頭、舞の地謡、太鼓も打ち、一調もされ、番外で美しい舞も舞ってくださいました。

修羅物などのけい古は、背の高い立派なお姿で一本の扇が右手にあれば太刀になり、左手に構えれば強靱な弓となります。「腰に力を入れて」と口ぐせにいわれました。

「左足を少し引き、右足を一歩引き、左足を引き揃える。」この一つの型のヒラキさえ、未だに苦勞の種として勉強している私です。

当時は火曜日がけい古日でした。会社の忙しい時、残業につぐ残業でキリキリ舞をした日でも先生のお宅の門をくぐり、庭の池の端にかけられた石橋を渡る時、鼓の音や、気合のこもった先生の掛声が聞えますとバツと現実から別世界にとび込んだように思われました。新年会、温習会、うとう会、そして、忘年会と一年中、皆忙しい忙しいといひながらも公私共に励みました。

いろんな失敗も重ねながら、女性の部員も多く、謡熱心な高橋先生に手をとられ、一歩一歩歩けるようにみんなで努力したあのころをほんとうに懐しく思い出します。

難さわざ、十七日、合同うたい会二十人盛況」とこの日記に書いてあるからまちがいないの。(笑)

**磯部** 新井さんが出張の帰りで、大金の方はトランクの下に入れておられたので無事だったが、小銭はちゃんと盗まれた。

**司会** 盗難事件の話は初めて聞く方もあると思いますので、その顚末を正確にお話してできる自信のある方……。

**磯部** あと始末までやったので私から……。

熱海荘の一階の小部屋にみんなの荷物、洋服をいっさい置いて、夕食のあと二階で地合せをわんわんやっている間にやられたらしい。気がついていたらみんな洋服のサイフがないんだ。

**西村** 例外二人あり。(場外から二人はもともと持っていなかったの  
声、大笑)

**磯部** 熱海荘は当時、熱海の酒屋さんのもので従業員も向こうの人だったんです。これは大変ということ  
で警察に届けたんです。そしたら翌日、中身をぬかれたサイフがゴミ箱に捨ててあったので、これは専門家  
だということになったんです。が、  
われわれ帰る金がない。新井さんが

たまたま出張の帰りで大金は難を免れたので、そのお金を拝借して帰ったわけです。

で、私は仕事柄、当時の人事部長幾度さんに、これこれこうだと報告したんですわ。幾度さんも笑っておられたけど、まあ熱海荘はまだ借りたばかりで規程もなく、金庫も用意していなかった、会社の管理も悪かったことやから弁償してやる、申告せいということ、あったかなかったか知らんけど申告して(笑)、それから熱海荘に金庫を据えつけて自主管理せいということになったんです。

(場外「総額いくらでした」「それをきいてはいけません」笑)

**水原** 補足、あれは寮とか保養所の専門家だったようですね。その後つかまったと聞きましたよ。

**富岡** もう一つ補足、あの日は来  
の宮神社の祭礼で、全国の腕ききが  
集まっていたんだそうです。

#### 新井会長 が誕生

**司会** ところで西村さん、これまでの参加の中で印象に残っていることは？

**西村** それは盗難事件のとき、なぜ私は金をとられなかったかという

そして会社も成長期にあり、その発展と共にとうとう会も、だんだん大きく成長してゆきました。

家事都合により私は退社して三島を離れ住み十年余り、その間健康を害したり、もろもろのこと、七、八年けい古を休んでおりましたが、先生との縁は大切に育てて参りました。

けい古を始めて久々に、五十年の大阪のとうとう会に参加させていただき、その盛会にまず驚き、感激はひとしおでした。健康も回復し、それからは毎年先生の指示を仰ぎ、演目も決めております。

すでにOBの今、何時までも変りない皆様のお誘いに毎年参加させていただいておりますことを心より有難く光栄に思っております。昔の懐かしいお顔ぶれ、また次々と参加される大勢の若手の皆様、年ごとに立派な成果を拝聴し、拝見し、すばらしい勉強の場所となっております。このとうとう会には私にとりましては一年の大きな目標であり生きがいでもあります。

今年は、はからずも、とうとう会の前に三島神社の行事、「木犀の夕」の奉納舞をお受けしお年を召した先生にいろいろ指導をいただきました。さて、その九月三日は先生のご縁故により、お笛の藤田大五郎師のご来島を得、本番前の打合せの時、藤田先生のお笛に対し拍子盤に向われた先生は八十歳とは思えず、近ごろ丸くなられた背もピシッと伸びて、例の気合のこもった掛声と共にパンパンパンと拍子を打たれるすさまじさは周囲の人々に息つくひまも与えず、それは見事な一騎打でした。

日ごろはさすがにお年に勝てず弱々しくなりましたが、拍子盤に向われると芸の化身になってしまうのでしょうか？

十一月二日(第十九回)のとうとう会が終ったあと先生に報告の電話をしましたら、

「無事に済んでおめでとうございます。さあまた来年ですね、私が見ておりましたら、何かいろいろ考えましようね」とのお言葉。

先生のお年を氣遣うようになったこのごろ、何とも淋しく、ただただご健康と長寿をひたすら希っております。

(昭和五十五年十一月記)



ことですね。

あれわね、ズボンをつるす時、逆さにするでしょ、するとサイフが重いのとびだしますね、それを見てこれは危ないと思ったんで姫鏡台の中に入れておいたんです。とられなかったのは水原さんと私だけだった。あとはみな油断があるね。(笑)

それと、四十九年から五十年にかけて病気になる五十二年の三井寺のうとう会から再開したんです。あの時は、熊野のシテをやらせていただきました。久方ぶりの再開だったの思い出深いですね。

**司会** 新井会長が印象に残ったことを一つ……

**新井** そうね、もともととうとう会には会長ってのはなかったんですよ。私はその会長を押しつけられたのは何回目のうとう会か忘れましたが、三島の佐野別邸でやった帰り、ソバ屋の二階で飲んだことがある。その時にうとう会というからには会長ぐらい置かなけりゃいかんということで、新井が一番古いのでやらせようと、私が宝生から観世に引っぱりこんだ中川年男さんに押しつけられた。これが一番印象に残ってるね。

僕は好きな者が集まっているんで幹事は必要だが、会長なんて必要な

いと思うんですが、ま、名誉会長ということになっておりますので、そのおつもりで……。

#### あさば旅館の思い出

**司会** いえいえ、会長は名誉会長とおっしゃっておられますが、正式に会長で、名誉ではないのでつけ加えておきます。

水原さんはいかがでしょう。

**水原** 何回目か私の記憶は頼りないですが、修善寺のあさば旅館で富岡さんが池を隔てた能舞台で薙刀をもって勇壮な舞を舞ったことですね。

もう一つは、富士工場の近くの老人ホームで命尾先生に指導していただきながら初めて胡蝶の番囃子をやったことが二番目。

三つ目は、大阪の豊津で中学校の先生をやめられた観世の先生が自分の家に舞台をおつくりになっているのを借りたことがありましたね。あの時赤いのを被り狸々の袴能をやったことが記憶に残っています。

**磯部** 私もやはり修善寺のあさば旅館の思い出ですね。池の向こうに能の本舞台があるんですね。そこをね、高橋さんに借りる借りるという一日借りてやったことですね。

**司会** その時は何人ぐらいの参加

だったのですか。

**磯部** 少なかったですよ。

**富岡** 観世では、新井、西村、磯部、大坪、私と、宝生は高橋門下と水原さんだったから十五、六人だったかな。

あのあさば旅館の思い出は、大協和への転勤の話を磯部さんから聞いていたので、富士での最後の思い出にと、修善寺の野田旅館のご主人から薙刀を借りて舞って、そして大協和へ転勤したんです。

**司会** 十何回かまで事務局をやられた高橋さんはいかがですか。

**高橋** それは毎年毎年、中心地は私のところなんで、熱海、三島のお寺、あさば旅館と私が富士におります間は、富士工場が設営せにゃいかんと一生懸命でした。今思うと地理的にも会場にも恵まれていたと思います。

今日のこの可睡齊も命尾先生の謡の会で昭和三十何年かに一度使わしていたことがあって、岡田君に当たってみたらと持ちかけてみたんです。

奥山の半僧坊は私自身があそこはいいんじゃないかと当ってみたら本当にいいところだった。ただ食いものがお粗末だった。(笑)

#### 息長く続けよう

**司会** 長い間、ご苦労様でした。ところでこれからのうとう会をどう発展させていきたいか、お一人ずつお願いします。

**新井** そうですね、むずかしいことですが、年一度、何人かの人が集まっていっしょに楽しむ、これがいいですよ。息長く続けてほしいですね。

若い人にお勧めして、ロートルは消えてゆくことですし、消えていってしまっただけでなくなってしまう。若い人に引きついでもらいたいと祈念します。

**磯部** まったくその通りでね。私も前もって考えてきたことは、今、新井会長がおっしゃったことと結論的にはいっしょで、長く続けていたきたい。単なるお祭りではなく、謡の効用の一つである趣味を通じてのお互いの交流がこの場ではかられる。これからは老人社会になるんでOBもふえていくんだから、OBとの交流をはかる上でも、ぜひ新人を開発して下さいといいたい、それにつきます。



「私は油断しなかった」(西村)。左から磯部さん・高橋さん・西村さん

狂言なども加えて……

高橋 私はね、かつて富士は宝生の大国だったんです。ところが今はさびれましてね。これをなんとか回復したい。まあそれよりも、謡の心は、観世、宝生を問わず喜多流でも同じなのです。四日市あたりで盛んだと聞いております喜多流などにも声をかけてみたらどうでしょう。それとも一つ、狂言というところどもは面白いと思いますが自分でやるとなるとなかなかやりにくいもん

です。ところが、案外盛んな世界があるように聞いています。狂言なんかに興味をもっている方々にも入っていただけたらと思います。

そして協和のとう会は、謡、狂言、囃子、仕舞と謡だけでなく盛んにしていただきたいと思います。

西村 世阿弥は本説を正すといった。本説とはいふなれば、平家物語、源氏物語、伊勢物語などで、こうしたバックグラウンドをもっと勉強してもいいんじゃないか。とう会の午前中に源氏物語講釈とか、伊勢物語講釈をきくといったことがあってもいいのではなからうかと思っています。

水原 前にもいったことがあります。部拍子にのっているということですね。ところが明治以前までは殿様や町方がスポンサーであつたんですがだんだんスポンサーがアマになってから拍子のことをあまり強くいわなくなっちゃった。それで、素謡を発明した。しかしもとは、拍子に合う音楽だったんですね。ですからどうせお遊びでやるんなら、いっちゃったるかと思えていいように思ふんです。で、私は拍子のことを、うるさくいうもんですから宝生の評判が悪いんです。しかし素人は袴能

までやっていいんですから、なんとかとう会では袴能まで出してきたい、努力したいと思っています。

一度やめても必ず戻れ

司会 最後にありますが、後に続く若い人達に望むことを一言ずつ……

水原 謡は一度やめても必ずもどる、と前に話したことがあります。前にやっていった人をどんどん引っぱり込んでください。

富岡 とう会では、やたらと難かしい曲を出さずに、もっとポピュラーなものでいいんです。その表現の仕方をよく練習してやってみる。そうすればもっと多くの人が参加できると思います。

もう一つ謡をはじめたからには、地拍子を習ったらしい、舞もやってみたらいいし、できれば囃子もやったらいい。そうすれば、面白さ、興味が倍増するように思います。機会があつたらぜひこの分野にも目を向けてほしいと思います。

西村 私の主張はただ一言、歴史と文学を知ろう、この一点です。

高橋 私の経験から、このとう会をずっと続けていくためには、やはり素謡だけでなく舞も囃子も続けていきたいと思っています。そうするこ

とによって謡と囃子の関係を自然と会得してくるものなんです。

天狗 になるもよし……

磯部 私は二つある。一つは、おやめになつてはいけませんよ。稽古していかないからとう会に行かないよというのではなく、とう会だから行くか、となつてほしい。

それからもう一つは、私は謡が下手だからと謙遜していらっしゃる方がいますが、謡が上手になりたければ謙遜してはいけません。天狗になつてうちに天狗の鼻を押し折られる時がある。その時にもう一つ上手になる。それと、上手な人の謡を聞くこと。うたい方がわかると耳がこえてくる。そしてあの人のまね、この人のまねをすることで上達するものなんです。天狗の鼻を押し折るのは我々は上手ですから、大きな声でうたってください。

新井 お互に興味を同じくする者が、どうぞ仲よく末永く、ごいっしょに。私もやれるかぎりやります。これも一つのご縁ですから、いつまでもくじけることなく、これを祈念しております。

司会 ありがとうございます。

## 次の二十年の発展を担って

### 若手世話役の立場から

#### 初舞台の思い出など

**司会** さきほどまでは、うとう会の二十年の歴史をふりかえる座談会をお聞きしていましたが、この座談会では、日ごろ各事業場で謡のお世話をいただいている若手の方々を指名させていただきました。そしてこれからの二十年を担うみなさん方に「うとう会」や謡曲に対する忌憚のないご意見をおききしようというわけです。

まず、うとう会に最初に参加したころの思い出などからおうかがいしましょう。

**田辺** 私の初舞台は、四日市工場当時で五十二年の希望荘の時でした。謡は、その前年に富岡さん（現土浦工場長）から強引に勧誘されてはじめました。最初は、本の記号もなんにもわからないときに、熊沢先生の前で、とにかく俺の真似をせいとま

るっきり口うつしで、固くなって声を出したのを覚えています。ただ、希望荘での初舞台はなにをやったかわ覚えていません。

**司会** 先ほどの先輩たちの話を聞くにつけ、古い人ほど古いことをよく覚えていられるもので若い人は、ほんの数年前のことも覚えていない。（笑）

**小山** 私が最初に参加したのは、四十九年の館山寺だったと思います。入部のきっかけというのは、入社したときに富士工場と東研を見学したのですが、その時東研の研友会の副会長をやっていたのが奈良さんでして、いろいろとクラブ紹介をしてくれたとき謡曲部の紹介がありました。その時、私も馬鹿なことを聞かなければよかったんですが、「何流ですか」と聞いたのが悪かったです。それと同期入社の人がちょうど森さんの部屋でして、しばしば昼休

みに森さんの室に行くので、ちょっとついて練習を見にいったのが入部と認められてしまいました。あれよあれよというまにここまでできてしまいました。

#### 野次馬で謡も鼓も……

**長倉** 私が始めたのは、小山さんより二年前です。三島の玉沢でやった時が最初です。

なんとなく野次馬で首を出して始めたのがきっかけです。玉沢では橋弁慶の子方でした。それから二、三年たってから、鼓でもと……謡も鼓も一向に上達しなくて、ただなんとなく続けています。

**司会** 私も長倉さんとだいたいいいっしょですね。四十七年に入って、二年ぐらいで鼓を始めたんです。似たようなもんですね。

**長倉** いえ、でも、そちらはずつと上達なさって……はずかしい。

#### 出席者（発言順）

田辺 博章（東京支社・観世）  
小山しづり（東京研究所・宝生）  
長倉 久子（富士工場・宝生）  
鍛冶 義延（東京研究所・宝生）  
須藤 恵紀（土浦工場・観世）  
山田 義之（堺工場・観世）  
沢野 忠男（防府工場・観世）  
**司会**  
山家多喜男（四日市工場・観世）  
まとめ  
浅井 勝（富士工場・観世）

**司会** いえ、そんなことないですよ。（あわてて次の人を指名）

**鍛冶** 私の入社は四十八年です。東研で実習がありまして、それが森研でした。そのあと防府工場に配属になったわけですが、その時森研でお別れの席設けてくれました。その席でかなり強く謡に誘われたんです。でついうっかり東研に帰ってくるのがあったら謡をやりますよなんていったら、一年後に東研に転勤になりました（笑）それでもまだ



「ついうっかり謡をやるっていう…」(鍛治)。左から田辺さん・小山さん・長倉さん・鍛治さん

覚えていて男の約束だからと四十九年に始めたわけです。うとう会は、五十一年の希望荘でして、その時は融の連吟をやりました。当時は夢中で懇親会の記憶はあるんですが、謡の方はあまり覚えていません。

当時、組合の役員をやっていた関係もありまして翌年の三井寺から懇親会の司会をやらせていただくようになりまして、あの冷えた飯をたべています。

東研の宝生も先輩たちがご栄転されまして仲間もだんだん少なくなり昨年から私が部長をやるようになりました。今後は、いろいろな人たちが

のご意見をお聞きして人集めとか練習のやり方について参考にしたいと思います。

#### クモの糸にひっきり

司会 その辺の話は、後ほどとして、須藤さん初舞台の思い出などを……。

須藤 さきほど田辺さんは、富岡さんに強引に、と話されましたが、僕の場合はそれほどなかったです。そうですね富岡グモの張りめぐらしたクモの糸にひきかかったという感じですね(笑)それに私も四日市のなつかしさも手伝って……。

それと、私も生活に余裕があるわけでもないんで、手っとり早く旅行ができて、しかも会社から補助が出ると聞いていたので、そんなことで始めました。

初舞台は、赤とんぼ荘で小袖曾我でした。元来音痴で、人前でしゃべることは苦手でしたが、謡はお経みたいなもので、抑揚がなくて、大きな声さえ出していればいいじゃないかと思っただけで始めたんですが、初舞台では、胸がつまってしまつて……。声を長く続けようと思って、たくさん息を吸いこみますね、すると終わったとき、まだ息が残っていて

それが出てきてしまつて苦しかったなあという感じがありましたね。

それと、会に出てきますと前にお世話になった人たちと旧交を暖めることができるんで謡はどうでもいいんですけど、毎年できたいなあと思います。

山田 私の最初は、あじろ荘でやったときですから古いことは古いんですが、その時は羽衣の連吟をやったと思います。うとう会に初参加したときですが、堺から参加した者は、もう寝ようかと床についたんですが、どの部屋からも鼓や太鼓の音が鳴りだしまして、とても寝てられんというので、また起き出して練習を始めたというのを覚えています。

また、土浦の須藤さんもおっしゃっていました。うとう会では、堺から転勤された方々がいろいろな事業場におられますが、この会を通じてお会いできる点がいいですね。それと、外の事業場はきびしく勧誘されているようですが、堺はその点おとなしくやっております。でも今年は若い人がふえまして……。

#### 自分のレベルが目でわかる

司会 今年は、堺は新人二人を連れてこられて成績がよかったですね。

おとなしく勧誘されても実績があればいいわけで……(笑)

沢野 私は、四、五年前からの参加です。

うとう会についてですが、ベテランからきのうきよう初めた新人までが参加されていて真剣に練習の成果を発表されており、自分のレベルが目でわかる会だと思います。

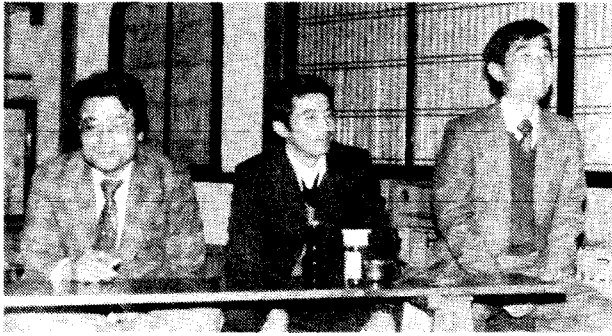
一年の練習で自分がどのくらいになったのか、昨年とくらべてどうだったかなど自分なりに評価ができて、ひじょうにいい会だと思います。また、いろんな曲、いろんなうたい方があり参考になります。最近きびしさがちょっと足りないのではないかなという気がしますけど……(笑)

#### 「秋」といったら「うとう会」

司会 さて、この座談会のメンバー選定のねらいですが、これが掲載されます二〇周年記念誌を新人の勧誘にぜひ使いたいと思ひまして、それにはベテランの話ももちろん参考になります。それより初心者の方が案外参考になるんじゃないかと思ひましてね。中にはかなりのレベルにある方もおられますが、入っていただきました。

そういう意味で、うとう会につい





「秋といったらうとう会…」(沢野)。左から  
須藤さん・山田さん・沢野さん

ての現在の心境をお聞かせください。  
**沢野** 全社の中でも会社の補助を  
いただいでやっているのは文化クラ  
ブでは、このうとう会だけではない  
かと思ひます。スポーツであればテ  
ニスぐらいでしょうか。他は対外試  
合がほとんどで。そういった面でこ  
れだけは続けたい。秋といったら  
「うとう会」(拍手、声援あり)と  
会社にも強く印象づけるためにもず  
っと続けてほしいですね。  
防府から大勢参加しますと、運賃  
もかなり苦勞しますので補助は助  
かります。

また、ベテランの方々も定年だか  
ら引退するなどといわれず、末永く  
参加してうとう会を盛りたててはし  
いと思ひます。

文化部で協和全体が集まるのは、  
これしかないと思ひますので、これ  
を誇りにしていきたいと思ひます。

#### 謡と西洋音楽に共通点

**司会** たいへん力強いご意見をい  
ただきました。そう力強くなくて  
も、ななめにかまえたご意見でも結  
構ですから願ひします。

**小山** 私が謡に關して思うこと  
ですが、私たちの年代は、日本音楽と  
いいますと、とかく老人のやるもの  
だと思ひている人が、ずいぶんいる  
と思うんです。でも本質的には、西  
洋音楽と謡いは似たところがあるよ  
うに思ひます。私は今オーケスト  
ラの方もやっているんですけど(注  
ビオラ奏者)拍子のとり方はかなり  
違ひますが、息の入れ方が似てい  
るところがあるんです。それはどこだ  
というまでにはいたっていませんが  
……。

秋田の方に「わらび座」というオ  
ーケストラがあるんですけども、そ  
こに入団するには西洋楽器ができる  
ことと日本の楽器が一つできること

が条件なんですね。日本人なら日本  
の楽器も必要だという心意氣がうれ  
しいですね。(場外から声あり「日本  
の小唄、端唄、俗曲みんないいぞ。  
もっとも私の小唄は、宝生流になる  
が、日本の音楽をもっと愛しましょ  
うといいたいね。」)

**司会** 日本人である以上、日本音  
楽には心の上で繋がるものがたくさ  
んあるように思ひますね。鍛治さん  
いかがですか。

**鍛治** 謡に關して僕はまだまだわ  
からない面がたくさんあるんですが  
今お話がありました日本音楽には興  
味をもっています。

東京のと真中のある団地の子供は  
日本語の子守歌が一番よく眠るとい  
う研究報告があったりするぐらいに  
周囲がいくら西洋的になっても、し  
ゃべり言葉の調子が心に響くものな  
んです。

それでうとう会に關しては、そん  
なに力強いことは申し上げられませ  
んが、大いに懇親会の充実(笑)を  
はかりたいと思ひます。

うとう会が終つたら、また仕事を  
一生懸命にやる!

#### 集団ブレイの妙味を体得

**田辺** 私は謡曲に誘われる前は詩

吟をやっていました、詩吟のサーク  
ルが崩壊しまして、ちょうど渡りに  
舟のように誘われて謡に入ったん  
ですが、詩吟と謡曲のちがいを一言で  
いうと、個人ブレイと合同演奏の違  
いだろーと思ひます。

謡のよさは、やはりみんなの合奏  
であるという点だと思ひます。

これが能の形になると、囃方、仕  
舞や方との合奏になる。みんなの  
和の極限状態で表現されるものが能  
という芸術じゃないかと自分で評価  
しています。西洋音楽の中にもオペ  
ラがありますが、それ以上によさを  
秘めた芸術だと思ひます。

西洋のオペラは楽符があり、全体  
を指揮する指揮者が一人いますが、  
能の場合は、地頭はありますが、こ  
れも全体を指揮するわけではないし。  
聞いた話ですが、プロの能楽師さん  
の間には「仕掛ける」という台詞が  
あるといひます。これは地頭がシテ  
に仕掛ける、つまり自分のテンポに  
引き込もうとしてテンポを早めたり  
遅めたりする、これに対してシテが  
応じて微妙に反応する、あるいは囃  
方が反応するといひます。そういう  
相互の關係が実に面白くて、集団ブ  
レイの妙味が、謡の中で体得できる  
んじゃないかと思ひます。

こういう意味で、もっともっと多くの人が謡を見直して、西洋音楽からもどっていただきたいと思います。

#### 新しい仲間を増やすために

**司会** 謡の心を極めたようなお話でしたが、こういう若い人がたくさんいますので、とう会も心強く安心していただいて結構かと思えます。こうしたお話をもう少しやりたいのですが、時間の制約もありますので、次の話題に移らせていただきます。

で、今日お集まりいただいたのは、各グループのお世話で日ごろ苦勞をかけている方々ですので、今後の新人の勧誘をいかにやっていけばいいのか、その辺のところをお聞きたいと思います。今年実績を残されました堺の山田さんからお願います。

**山田** 今年は新人が三人入ったわけですが、一人は、お茶をやってもらった人で、お茶と謡はつきものだろうと勧めた人、もう一人は、平尾工場長が宝生流に誘った人ですが、堺はみな観世の先生に習っているんで観世に入ってもらった人で、もう一人は、なにもやっていない者でして健康にもいいのでどやと勧めました。

二人とも動機はちがいますが、堺は時参加しなかった時もありまして、これはいかんという事で努力しました。

**司会** 須藤さんはご自分の経験からいかがですか。

**須藤** この間、家でうなっていましたら、小六の子供が、テレビの水戸黄門より上手だよと（笑）。家でやってみると子供にもリズムのようなものはわかるようになるんじゃないでしょうか。

私は、さきほど鍛冶さんが、懇談会の充実といわれましたが、私もなんか宝生だ観世だとやりあっているような（笑）印象をうけましたのでまず懇親会を大いに充実させて仲良く発展させるようお願いしたいですね。

#### 観世と宝生は一体

**高橋** 観世と宝生とは一体なんですか。素謡はちよつとちがいますが、囃子は諸流一体なんです。明日それを実演しますからよく聞いて下さい。

**田辺** うとう会でも今は、観世と宝生をわけていますが、あれはいつしよに皆さんのですか。シテを観世ワキが宝生といったように、地謡は合同というわけにはいかんと思いますか……。

**安島** 参考に私からお話ししましょう。かつて富士工場は宝生の方がたくさんおられて、大坪さんが一人観世だったことがあります。そのころ宝生の中に入って大坪さんがうたったことがあります。さては大坪さん宝生に寝返ったか！と思ったんですが、一人観世でうたわれました。これは高橋さんが、そうした実験を試みたんだと思います。いかがですか高橋さん。

**高橋** そうです。その通り。ほかにいうことなし。

#### 聴きたい人たちの参加も

**司会** 新人がほしいですね。特に女子の新人が。長倉さんいかがです。

**長倉** ん……私は特別動機があつてはじめてではなく、なんとなくですから。

あのー、若い人にやってみないかと誘うんですが、いろんなものに興味を示すんだけど、日本古来のものには、どうも興味を示しませんね。

しつこく誘うのもいやですし……。話を聞いているともう少ししつこくてもいいのかなとも思うんです。堺工場の様子を聞きますとあーいいなあと、ちよつとひがんでみたりします。

前にはクラブ員でない人が二、三人うとう会を聴きにきたんですけれどそれっきりです。

**司会** 声をかけても受けつけませんか。

**長倉** 脈のなさそうな人には私も声をかけませんので、まるっきりだめということではないんですが。富士には前にやっていた人が結構いますし、もっと女子が参加するといいいんですが。

**小山** 今はほかに遊ぶことがたくさんありますので、なかなか誘いづらいんです。

こういう機会に聴きたい人に参加してもらったらいかがでしょうか。今は謡をうたう人の会ですが、聴く人の会でもいいのではないのでしょうか。聴くことによって底辺を広げれば、謡をやる人も増える可能性はあると思うんです。（賛成！の声多数）

**司会** まだまだご意見をうかがいたいと思いますが、時間もきましたので、この辺で終りたいと思います。ベテランの皆さんの期待に応えるよう、私たち若手は努力しなければなりません。今日のお話の様子は、十分伝えられそうな気がしてきました。ありがとうございました。

# 協和うとう会 会員名簿

関係資料より選択(うとう会出欠は未定もあり)

| 区分 |       | 読み   | 氏名     | 会員紹介(記念誌掲載) |    |    |    | 消息・他 |
|----|-------|------|--------|-------------|----|----|----|------|
|    |       |      |        | 20          | 30 | 40 | 50 |      |
| h1 | 本社・宝生 | いもと  | 井本 泰   |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | やまも  | 山本 敏夫  |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | うえず  | 上杉 恵美子 |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | おかわ  | 小川 初江  |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | ふかさ  | 深沢 朝子  |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | やすい  | 安井 道子  |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | やすちか | 安近 毅   | ○           | △  | ○  |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | ありま  | 有馬 三重子 |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | こは   | 小林 治子  |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | なかむ  | 中村 豊子  |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | こかみ  | 小上 善子  |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | みすはら | 水原 淑子  |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | すす   | 鈴木 康夫  |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | おさ   | 長 利雄   |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | のくち  | 野口 信夫  |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | おおく  | 大草 進   | ○           | ○  | △  |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | ひさ   | 久永 隆   |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | きたた  | 北田 宗平  |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | やまか  | 山県 頌子  | ○           | ○  | △  |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | くし   | 久代 浩徳  | ○           | ○  | △  | ○  |      |
| h1 | 本社・宝生 | おた   | 小田 文一  |             | △  | ○  | ○  |      |
| h1 | 本社・宝生 | なかむ  | 中村 寛之助 |             | △  | △  |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | きたむ  | 北村 啓子  |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | なかか  | 中川 年男  | ○           | ○  |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | ふした  | 藤田 美恵子 |             |    |    |    |      |
| h1 | 本社・宝生 | おかた  | 岡田 英明  | ○           | △  | ○  | ○  |      |
| h1 | 本社・宝生 | みすはら | 水原 圭子  |             | ○  | △  |    | 家族   |
| h1 | 本社・宝生 | やなぎ  | 柳澤 徳雄  |             |    |    |    |      |
| h2 | 東研・宝生 | みすはら | 水原 一瓢  | ○           | ○  |    |    |      |
| h2 | 東研・宝生 | もり   | 森 泰城   | ○           | △  |    |    |      |
| h2 | 東研・宝生 | ふるや  | 古屋 晃   |             |    |    |    |      |
| h2 | 東研・宝生 | たかや  | 高山 健一郎 | ○           | ○  | ○  |    |      |

|    |       |      |           |   |   |   |   |  |
|----|-------|------|-----------|---|---|---|---|--|
| h2 | 東研・宝生 | なら   | 奈良 高      | ○ | △ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | こむ   | 小室 敏雄     |   |   |   |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | みねうら | 峯浦 和幸     | ○ | △ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | さめ   | 鮫島 広年     | ○ | △ | ○ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | ふるか  | 古川 秀之     |   |   |   |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | たし   | 田代 洪子     |   |   |   |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | さいと  | 斉藤 孝子     |   |   |   |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | みねうら | 峯浦 正行     |   |   |   |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | みさ   | 三沢 正愛     | ○ |   |   |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | てら   | 寺西 正行     | ○ | ○ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | たむら  | 田村 圭史郎    |   |   |   |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | もりもと | 森本 真      | △ | ○ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | たかい  | 高井 春樹     | ○ | △ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | しみ   | 清水(町田) 玲子 | ○ | △ |   |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | きくち  | 落合(菊池) 恵子 | ○ | △ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | かす   | 粕川 元一     | ○ | △ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | まつお  | 松尾 英毅     | ○ | ○ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | こや   | 小山 しづり    | ○ | △ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | かわい  | 川合 正允     | ○ | ○ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | こし   | 輿水 洋一     |   |   |   |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | かし   | 鍛冶 義延     | ○ | ○ | △ | ○ |  |
| h2 | 東研・宝生 | おくさ  | 奥定 範子     |   |   |   |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | かわもり | 河盛 幹雄     | ○ | △ | ○ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | たかの  | 高野(永山) 正子 | ○ | △ | ○ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | むらかた | 村形 力      |   |   |   |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | ふしし  | 藤代 欣也     |   | △ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | やまも  | 山元 一弘     |   | △ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | きくち  | 菊地 泰弘     |   |   |   |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | まつも  | 松本 正      |   | ○ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | おお   | 大内 弘造     |   | △ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | はまく  | 浜口(渡辺) 元香 |   | △ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | もり   | 森 英郎      |   | △ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | わたな  | 渡辺 大介     |   | △ | △ |   |  |
| h2 | 東研・宝生 | いし   | 石田 賢吾     |   |   |   | ○ |  |
| h3 | 富士・宝生 | たかは  | 高橋 孝夫     | ○ | ○ | ○ |   |  |
| h3 | 富士・宝生 | もちつ  | 望月 美江     | ○ | ○ | △ |   |  |
| h3 | 富士・宝生 | かと   | 加藤 穂作     |   |   |   |   |  |
| h3 | 富士・宝生 | わたな  | 渡辺 和子     |   |   |   |   |  |



|    |       |     |           |   |   |   |   |    |
|----|-------|-----|-----------|---|---|---|---|----|
| h3 | 富士・宝生 | ますた | 増田 英子     |   |   |   |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | いたか | 板垣 裕夫     |   |   |   |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | かね  | 金田 高枝     | ○ | △ | △ |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | きと  | 木戸 利子     |   |   |   |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | かわき | 河北 信二     |   |   |   |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | もちつ | 望月(木下)登志子 | ○ | △ | △ |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | まつい | 松井 和子     |   |   |   |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | かわか | 川上 洋子     |   |   |   |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | かと  | 加藤 初江     |   |   |   |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | つか  | 塚谷 則子     | ○ | △ | ○ |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | たかは | 高橋 純子     | ○ | △ | △ |   | 家族 |
| h3 | 富士・宝生 | かつ  | 勝又 すみ子    |   |   |   |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | きも  | 木元 京子     |   |   |   |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | しま  | 島森 登美代    | ○ | ○ | △ |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | かつ  | 勝又 菊枝     | ○ | △ | △ |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | はは  | 馬場 治次     | ○ | △ | △ |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | こん  | 近藤 明      | ○ |   | ○ | ○ |    |
| h3 | 富士・宝生 | こん  | 近藤 立子     |   |   |   |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | おおは | 大橋 良作     |   | ○ | ○ |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | なかく | 長倉 久子     | ○ | ○ | △ |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | ひらお | 平尾 学      | ○ | ○ | ○ |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | いいじ | 飯島(藤原)みよ子 | ○ | △ |   |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | すす  | 鈴木 正美     | ○ | ○ | ○ | ○ |    |
| h3 | 富士・宝生 | わかす | 若杉 敦子     |   |   |   |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | くめ  | 久米 保子     |   |   |   |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | さわた | 沢田 恵美子    |   |   |   |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | やまも | 山本 治      |   |   |   |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | こは  | 小林 薫      |   |   |   |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | こは  | 小林 好美     |   | △ | △ |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | なかさ | 中里 宜資     |   | △ | △ | ○ |    |
| h3 | 富士・宝生 | しま  | 島田 順一     |   | ○ | △ |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | やお  | 矢尾 幸三     |   | △ | ○ |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | のむら | 野村(岡野)博子  |   |   | ○ | ○ |    |
| h3 | 富士・宝生 | まるや | 丸山 和美     |   |   | △ |   |    |
| h3 | 富士・宝生 | かと  | 加藤 恵理     |   |   |   | ○ |    |
| h3 | 富士・宝生 | もりた | 森田 英基     |   |   | △ | ○ |    |
| h3 | 富士・宝生 | あき  | 秋山 和子     | ○ |   |   |   | 家族 |
| h3 | 富士・宝生 | なかい | 永井 三重子    | ○ | △ | △ |   | 家族 |

|    |       |      |        |   |   |   |   |    |
|----|-------|------|--------|---|---|---|---|----|
| h3 | 富士・宝生 | もり   | 森山 孝広  |   |   |   | ○ |    |
| h3 | 富士・宝生 | やぎ   | 八木 信宏  |   |   |   |   |    |
| h8 | 宇部・宝生 | ひるた  | 昼田 了   |   | ○ | △ |   |    |
| h8 | 宇部・宝生 | むらかみ | 村上 静雄  |   | ○ | ○ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | あらい  | 新井 純   | ○ | ○ | ○ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | にしむ  | 西村 淳   | ○ | ○ | ○ | ○ |    |
| k1 | 本社・観世 | おおつ  | 大坪 一弥  | ○ | ○ | ○ | ○ |    |
| k1 | 本社・観世 | くほ   | 久保 重夫  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | なかむ  | 中村 侑郎  |   |   | ○ | ○ |    |
| k1 | 本社・観世 | うん   | 海野 尚幸  | ○ | △ | △ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | さわむ  | 沢村 重麿  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | いまい  | 今井 政司  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | なかむ  | 中村 作也  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | うん   | 海野 安子  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | たき   | 滝 明夫   |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | あさの  | 浅野 進   |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | やすし  | 安嶋 将   | ○ | ○ | ○ | ○ |    |
| k1 | 本社・観世 | はとり  | 服部 幸   |   | ○ | △ | ○ | 家族 |
| k1 | 本社・観世 | もりひろ | 守弘 薫子  | △ | ○ | △ | ○ | 家族 |
| k1 | 本社・観世 | まる   | 丸田 千鶴  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | まる   | 丸田 千枝  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | まき   | 牧野 母堂  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | かわの  | 河野 伸子  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | にしむ  | 西村 道子  | ○ | ○ | ○ | ○ | 家族 |
| k1 | 本社・観世 | たき   | 滝 夫人   |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | もりや  | 森山 夫人  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | さいと  | 斉藤 祐一  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | たかさ  | 高阪 和子  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | みすたに | 水谷 綾子  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | あさの  | 浅野 明子  |   |   | △ |   | 家族 |
| k1 | 本社・観世 | あさは  | 浅原 方平  |   | ○ | ○ | ○ |    |
| k1 | 本社・観世 | かと   | 加藤 包子  |   | ○ | △ | ○ | 家族 |
| k1 | 本社・観世 | あま   | 天野 美智子 |   | △ | ○ | ○ | 家族 |
| k1 | 本社・観世 | みつ   | 光野 由美子 |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | いけ   | 池田 勝   | ○ | △ | △ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | もりや  | 森山 清孝  | ○ | △ | ○ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | こおの  | 紅野 昭   |   | △ | △ |   |    |

|    |       |      |        |   |   |   |   |    |
|----|-------|------|--------|---|---|---|---|----|
| k1 | 本社・観世 | わたな  | 渡辺 薫   | ○ | ○ | ○ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | まつさ  | 松崎 大八郎 |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | おの   | 小野 正道  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | よした  | 吉田 紀子  | ○ | ○ | △ | ○ |    |
| k1 | 本社・観世 | あき   | 秋山 安   | ○ | △ | △ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | まつい  | 松井 信行  | ○ | ○ | △ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | はとり  | 服部 浩三  |   | △ | △ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | こか   | 古賀 源太郎 | ○ | △ | △ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | はまの  | 浜野 賢太郎 |   | △ | △ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | かと   | 加藤 博通  |   | △ | △ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | さほも  | 沢本 和容  | ○ | △ | ○ | ○ |    |
| k1 | 本社・観世 | むた   | 牟田 義彦  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | ふした  | 藤田 良輔  | ○ | ○ | ○ | ○ |    |
| k1 | 本社・観世 | たしみ  | 但見 靖啓  |   | ○ | ○ | ○ |    |
| k1 | 本社・観世 | おの   | 小野 博史  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | みやお  | 宮尾 行男  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | かみ   | 上條 佑蔵  | ○ | △ | △ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | にかい  | 二階堂 建  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | つる   | 鶴来 伸一  | ○ | ○ | △ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | かわも  | 河本 太   | △ | △ | △ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | わたな  | 渡辺 尚子  |   | ○ | ○ | ○ |    |
| k1 | 本社・観世 | かわむ  | 川村 實   | ○ | ○ | △ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | のむら  | 野村 忠亮  | ○ | ○ | ○ | ○ |    |
| k1 | 本社・観世 | よした  | 吉田 綾子  | ○ | △ | △ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | かわもり | 河盛 迪子  |   | ○ | △ | ○ | 家族 |
| k1 | 本社・観世 | こま   | 小松 祥男  |   | △ | ○ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | おもた  | 面谷 澄子  |   | ○ | △ |   | 家族 |
| k1 | 本社・観世 | おかか  | 岡垣 克則  |   | ○ | ○ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | こいけ  | 小池 方子  |   | △ | △ |   | 家族 |
| k1 | 本社・観世 | ほそ   | 細見 浩司  |   |   |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | きたか  | 北河 康之  |   |   | ○ | ○ |    |
| k1 | 本社・観世 | とみた  | 富田 篤尚  |   |   | ○ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | さと   | 佐藤 誠   |   | △ | △ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | しけ   | 重田 浩一  |   | △ | △ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | すか   | 菅 義人   | △ | △ | △ |   |    |
| k1 | 本社・観世 | てし   | 手島 正子  |   | ○ | ○ |   | 家族 |
| k1 | 本社・観世 | にしや  | 西屋 寿美子 | ○ | △ | △ |   | 家族 |

|    |       |     |           |   |   |   |   |    |
|----|-------|-----|-----------|---|---|---|---|----|
| k1 | 本社・観世 | はも  | 場本 毅      |   | △ |   |   |    |
| k1 | 本社・観世 | まつむ | 松村 茂      |   | △ |   |   |    |
| k2 | 東研・観世 | おかち | 岡地 諒      | ○ | ○ | ○ |   |    |
| k2 | 東研・観世 | やくら | 八倉巻 忠二    | ○ | △ |   |   |    |
| k2 | 東研・観世 | きむ  | 木村 一雄     | ○ | ○ | △ |   |    |
| k2 | 東研・観世 | のくち | 野口 貞夫     | ○ | ○ | △ | ○ |    |
| k2 | 東研・観世 | しむ  | 志村 元      | ○ | △ | △ |   |    |
| k2 | 東研・観世 | なかは | 中原 博明     | ○ | △ | △ |   |    |
| k2 | 東研・観世 | はやし | 林 峰之      | ○ | ○ | △ |   |    |
| k2 | 東研・観世 | ふるか | 古川 忠康     | ○ | △ | △ |   |    |
| k3 | 富士・観世 | まつも | 松本 泰子     |   |   |   |   |    |
| k3 | 富士・観世 | たて  | 立林 鉄也     | ○ | △ | △ |   |    |
| k3 | 富士・観世 | おおつ | 大坪 栄子     | ○ | ○ | △ |   | 家族 |
| k3 | 富士・観世 | あさい | 浅井 勝      | ○ | △ | △ |   |    |
| k3 | 富士・観世 | みい  | 三池 公恵     | ○ | ○ | ○ | ○ | 家族 |
| k3 | 富士・観世 | さかい | 坂井 満里子    |   | △ | △ |   |    |
| k3 | 富士・観世 | しけ  | 重田 卓雄     |   |   |   |   |    |
| k3 | 富士・観世 | みい  | 三池(高田) 曜子 |   |   | △ |   |    |
| k4 | 土浦・観世 | こく  | 木暮 正祐     | ○ | ○ | △ |   |    |
| k4 | 土浦・観世 | はは  | 馬場 国男     | ○ |   |   |   |    |
| k4 | 土浦・観世 | たつ  | 巽 俊一      | ○ | ○ | △ | ○ |    |
| k4 | 土浦・観世 | ももせ | 百瀬 三雄     | ○ | △ | △ |   |    |
| k4 | 土浦・観世 | うえむ | 上村 清治     |   |   |   |   |    |
| k4 | 土浦・観世 | おはら | 小原 嘉人     | ○ | ○ | ○ | ○ |    |
| k4 | 土浦・観世 | ひらの | 平野 久夫     |   |   |   |   |    |
| k4 | 土浦・観世 | ささき | 佐々木 二郎    | ○ | △ | △ |   |    |
| k4 | 土浦・観世 | おおも | 大森 大陸     | ○ | ○ | ○ | ○ |    |
| k4 | 土浦・観世 | こに  | 小西 正春     |   |   |   |   |    |
| k4 | 土浦・観世 | わたな | 渡辺 昇      | ○ | ○ | △ |   |    |
| k4 | 土浦・観世 | たなか | 田中 久      |   |   |   |   |    |
| k4 | 土浦・観世 | おもた | 面谷 祐二     | ○ | ○ | △ |   |    |
| k4 | 土浦・観世 | くほ  | 久保 伸篤     | ○ | △ | △ |   |    |
| k4 | 土浦・観世 | のくち | 埜口 登      | ○ | ○ | △ |   |    |
| k4 | 土浦・観世 | いけ  | 池田 真知子    | ○ | △ | △ |   |    |
| k4 | 土浦・観世 | すと  | 須藤 恵紀     | ○ | ○ | △ |   |    |
| k4 | 土浦・観世 | かわむ | 川村 精一     |   |   |   |   |    |
| k4 | 土浦・観世 | かん  | 神林 まり子    |   |   |   |   |    |

|    |        |      |        |   |   |   |   |    |
|----|--------|------|--------|---|---|---|---|----|
| k4 | 土浦・観世  | きひ   | 木引 弘司  |   |   |   |   |    |
| k4 | 土浦・観世  | もとは  | 本橋 玲子  |   |   |   |   |    |
| k4 | 土浦・観世  | まい   | 毎田 治美  |   | △ | △ |   | 家族 |
| k4 | 土浦・観世  | かと   | 加藤 弥生子 |   | ○ | ○ | ○ | 家族 |
| k4 | 土浦・観世  | すす   | 鈴木 廣   |   | ○ | △ |   |    |
| k4 | 土浦・観世  | おおえ  | 大枝 正三  |   | ○ | △ |   |    |
| k4 | 土浦・観世  | おかや  | 岡山 貞治  |   |   |   |   |    |
| k4 | 土浦・観世  | いいじ  | 飯島 重治  |   |   | ○ |   |    |
| k4 | 土浦・観世  | そた   | 曾田 道久  |   |   |   |   |    |
| k4 | 土浦・観世  | こは   | 小林 誠   |   |   | ○ |   |    |
| k4 | 土浦・観世  | すす   | 鈴木 敏行  |   |   | ○ | ○ |    |
| k4 | 土浦・観世  | おお   | 大山 哲   |   |   |   |   |    |
| k4 | 土浦・観世  | さか   | 坂本 美枝子 |   |   |   | ○ |    |
| k5 | 四日市・観世 | とみ   | 富岡 啓太郎 | ○ | ○ | ○ | ○ |    |
| k5 | 四日市・観世 | みすの  | 水野 学   | ○ | ○ | △ |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | あさい  | 浅井 昇   | ○ | ○ | ○ |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | おの   | 小野 重光  |   |   |   |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | まき   | 牧野 八百子 |   |   |   |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | いそ   | 磯部 昌彦  |   |   |   |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | もり   | 森 博    |   |   |   |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | さくむ  | 作村 武夫  | △ | △ | △ |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | やまく  | 山口 豊   |   |   |   |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | やの   | 矢野 豊   |   |   |   |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | こいす  | 小泉 伸一  |   |   |   |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | なかし  | 中島 義照  |   |   |   |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | とみ   | 富岡 正典  |   |   |   |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | すす   | 鈴木 正直  | ○ | ○ | ○ |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | みとり  | 緑 静男   | ○ | ○ | ○ | ○ |    |
| k5 | 四日市・観世 | まさき  | 政木 英夫  |   |   |   |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | さと   | 佐藤 恒治  | ○ | ○ | ○ | ○ |    |
| k5 | 四日市・観世 | やまか  | 山家 多喜男 | ○ | ○ | ○ | ○ |    |
| k5 | 四日市・観世 | さかく  | 坂口 進一郎 |   |   |   |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | こと   | 湖東 まゆみ |   |   |   |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | さと   | 佐藤 護   | ○ | ○ | △ |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | たなへ  | 田辺 博章  | ○ | ○ | ○ | ○ |    |
| k5 | 四日市・観世 | すか   | 菅谷 享   | ○ | △ | △ |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | みすたに | 水谷 利明  |   |   |   |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | いし   | 石塚 謙二  | ○ | △ | △ |   |    |



|    |        |      |           |   |   |   |   |    |
|----|--------|------|-----------|---|---|---|---|----|
| k5 | 四日市・観世 | いいじ  | 飯島 仁司     | ○ | △ | △ |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | かみ   | 上森 茂      |   | ○ | ○ | ○ |    |
| k5 | 四日市・観世 | さいき  | 斎木 一枝     |   |   |   |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | きたに  | 木谷 芙美枝    |   | ○ | ○ | ○ | 家族 |
| k5 | 四日市・観世 | やまの  | 山野 順三     |   | ○ | ○ | ○ |    |
| k5 | 四日市・観世 | おはた  | 小畑(野村)真子  |   |   | ○ |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | つさき  | 津崎 展子     |   |   | ○ |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | あさの  | 浅野 由吏江    |   |   | ○ |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | たにさ  | 谷崎(今井)純子  |   |   |   |   |    |
| k5 | 四日市・観世 | なかむ  | 中村 和子     | ○ | △ | △ |   | 家族 |
| k6 | 大阪堺・観世 | いそ   | 磯部 武夫     | ○ | ○ | ○ |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | ほり   | 保利 静人     | ○ | △ | △ |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | にい   | 新居 栄治     |   |   |   |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | のくち  | 野口 栄男     | ○ | ○ | △ |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | さかな  | 阪梨 滋      |   |   |   |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | かわさ  | 川崎 資定     | ○ | ○ | ○ |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | なかか  | 中川 庄次郎    |   |   |   |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | ふくい  | 福井 清史     | ○ | ○ | △ | ○ |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | やまた  | 山田 義之     | ○ | ○ | ○ | ○ |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | なかか  | 中川 清淳     |   |   |   |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | みやもと | 宮本 邦彦     |   |   |   |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | つし   | 辻村 秀員     | ○ | △ | △ |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | きたに  | 木谷 正敦     | ○ | ○ |   |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | ふしい  | 藤井 武夫     | ○ | ○ | ○ |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | さいと  | 斉藤 弘之     | ○ | ○ | △ |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | いわせ  | 岩瀬 厚      | ○ | ○ | ○ |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | いなと  | 稲留 雄一     | ○ | ○ | ○ |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | なかむ  | 中村 真一     | ○ | △ | △ |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | みすた  | 水滝 彰一     | ○ | ○ | ○ | ○ |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | やき   | 矢木 宏一郎    | ○ | △ | ○ |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | おかと  | 岡藤 弘      |   | △ | △ |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | よしい  | 吉家 重夫     |   | △ | △ |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | やまく  | 山口 整次     |   | ○ | ○ |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | やぶし  | 藪下 尚夫     |   | ○ | ○ | ○ |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | きぬ   | 衣輪(野坂) 恵子 |   | ○ |   |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | きくも  | 菊守 悦三     | ○ | ○ | ○ |   |    |
| k6 | 大阪堺・観世 | さと   | 佐藤 武平     |   | ○ | △ |   |    |

|    |        |      |           |   |   |   |   |  |
|----|--------|------|-----------|---|---|---|---|--|
| k6 | 大阪堺・観世 | やお   | 八尾 和廣     |   | ○ | ○ | ○ |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | いとう  | 伊藤 保雄     |   |   |   |   |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | かんた  | 神田 信夫     |   | ○ | △ |   |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | せし   | 瀬島 常雄     |   | ○ | ○ | ○ |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | きさ   | 木佐 容子     |   |   |   |   |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | にしの  | 西野 邦明     |   | ○ | △ |   |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | にき   | 仁木 卓      |   | ○ | △ |   |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | みやけ  | 三宅 隆夫     |   | △ | △ | ○ |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | たかた  | 高田 功三     |   | ○ | △ |   |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | とい   | 土居 鋭一     |   | ○ | ○ |   |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | つな   | 綱野 政美     |   | ○ | ○ |   |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | かとは  | 門林 末男     |   | ○ | ○ |   |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | たむら  | 田村 直邦     |   | ○ | ○ |   |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | たけ   | 武居 泰生     |   |   | ○ |   |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | おおくら | 大倉 博      |   |   | △ |   |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | かわせ  | 河瀬 かおる    |   |   |   |   |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | おかわ  | 小川 幸男     | ○ |   |   |   |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | たなか  | 田中 均      | ○ | ○ | △ |   |  |
| k6 | 大阪堺・観世 | みなみ  | 南 亜夫      | ○ | △ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世  | こや   | 小山 武彦     | ○ | △ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世  | きし   | 岸田 軍二     | ○ | ○ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世  | とう   | 堂尾 秀友     | ○ | △ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世  | ふしい  | 藤井 美代子    | ○ | △ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世  | わかづ  | 若月 静人     |   | △ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世  | もりわ  | 森脇 亮      | ○ | △ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世  | あらし  | 嵐 代志子     |   |   |   |   |  |
| k7 | 防府・観世  | いまた  | 今田 義信     | ○ | △ |   |   |  |
| k7 | 防府・観世  | こか   | 古賀 勇治     | ○ | △ | ○ |   |  |
| k7 | 防府・観世  | やなき  | 柳 俣子      | ○ | ○ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世  | いまい  | 今井 孝一     | ○ | △ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世  | さわの  | 沢野 忠男     | ○ | ○ | ○ | ○ |  |
| k7 | 防府・観世  | つほ   | 坪郷(重田)恵子  | ○ |   | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世  | たけは  | 竹林 実      | ○ | △ | ○ |   |  |
| k7 | 防府・観世  | ふしい  | 藤井 祥孝     | ○ | ○ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世  | いけ   | 池田 進      | ○ | △ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世  | ささい  | 笹井 義晴     | ○ | ○ |   |   |  |
| k7 | 防府・観世  | たかや  | 高山(三戸)美津江 | ○ | △ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世  | まつさ  | 松崎 勝正     | ○ | △ | △ |   |  |

|    |       |      |           |   |   |   |   |  |
|----|-------|------|-----------|---|---|---|---|--|
| k7 | 防府・観世 | むらい  | 村井 俊夫     |   |   |   |   |  |
| k7 | 防府・観世 | たかや  | 多賀谷 和夫    | ○ |   |   |   |  |
| k7 | 防府・観世 | きの   | 木野 邦器     |   | △ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世 | いとう  | 伊藤 純江     |   |   |   |   |  |
| k7 | 防府・観世 | かわか  | 川上 佳昭     |   |   |   |   |  |
| k7 | 防府・観世 | しけ   | 重村 節子     |   | ○ | ○ |   |  |
| k7 | 防府・観世 | むらた  | 村田 義文     |   | △ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世 | すき   | 杉山 喜好     |   | △ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世 | かく   | 加来 佐吉     |   | △ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世 | うち   | 内田 和子     |   | △ | ○ |   |  |
| k7 | 防府・観世 | かめ   | 亀谷(伊藤) りか |   | △ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世 | はらた  | 原田 博彰     |   | ○ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世 | まつおか | 松岡 佐代子    |   | ○ |   |   |  |
| k7 | 防府・観世 | はまた  | 濱田 紳一郎    |   |   | ○ | ○ |  |
| k7 | 防府・観世 | もりや  | 森山 圭郎     |   | △ | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世 | ありも  | 有本 勝      |   |   | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世 | から   | 唐本 佳代子    |   |   | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世 | きの   | 木野 咲百合    |   |   | △ |   |  |
| k7 | 防府・観世 | まつし  | 松重 見司     |   | △ |   |   |  |
| k7 | 防府・観世 | やなき  | 柳 實       |   | ○ | △ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | ふしさ  | 藤沢 佐都子    | ○ | ○ | ○ | ○ |  |
| k8 | 宇部・観世 | しい   | 師井 伴子     |   |   |   |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | かと   | 加藤 七弥     | ○ | ○ | △ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | ふしな  | 藤永 静子     |   |   |   |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | たかは  | 高橋 栄一     | ○ | △ | △ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | いなは  | 稲葉 泰也     |   |   |   |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | いたむ  | 板村 政雄     |   | △ | △ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | わたな  | 渡辺 富和     | ○ | △ | △ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | まつさ  | 松崎 充      | ○ | △ | △ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | みやさき | 宮崎 英治     |   |   |   |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | みたに  | 三谷 哲雄     |   | ○ | △ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | なかと  | 永富 正人     |   | ○ | △ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | よしお  | 吉岡 征一     |   | ○ | △ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | なかお  | 永岡 重信     |   | ○ |   |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | おお   | 大上 哲也     |   |   |   |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | いく   | 幾田 登美子    |   | ○ | △ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | しけ   | 重原 広      |   |   |   |   |  |

|    |       |     |        |  |   |   |   |  |
|----|-------|-----|--------|--|---|---|---|--|
| k8 | 宇部・観世 | ふるや | 古谷 正勝  |  | ○ | △ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | はな  | 花田 有紀子 |  | ○ | ○ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | せに  | 銭谷 秀夫  |  |   |   |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | はら  | 原 卓司   |  |   |   |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | うえき | 植木 節子  |  |   |   |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | のむら | 野村 真由美 |  | ○ | △ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | にしも | 西本 徳之  |  | ○ | ○ | ○ |  |
| k8 | 宇部・観世 | さたな | 貞永 納   |  | ○ | △ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | ありま | 有馬 敏雄  |  | ○ | △ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | なかか | 中川 慶次  |  | △ | △ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | たなへ | 田辺 靖夫  |  | △ | △ |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | まつた | 松田 重久  |  | △ |   |   |  |
| k8 | 宇部・観世 | まな  | 真鍋 忠彦  |  | △ |   |   |  |
| k9 | 門司・観世 | しま  | 島田 活志  |  | △ | △ |   |  |
| k9 | 門司・観世 | よしむ | 吉村 信次  |  | △ | △ |   |  |
| k9 | 門司・観世 | えか  | 江頭 博   |  | △ | △ |   |  |
| k9 | 門司・観世 | うえま | 植松 武   |  | △ | △ |   |  |
| k9 | 門司・観世 | やまも | 山本 貞夫  |  |   |   |   |  |
| k9 | 門司・観世 | ふした | 藤田 善次郎 |  | △ | ○ |   |  |
| k9 | 門司・観世 | ひろな | 弘中 吉雄  |  | △ | △ | ○ |  |
| k9 | 門司・観世 | たき  | 滝下 晴次  |  | △ | △ |   |  |

協和うとう会 グループ別 出演者演目(地謡は除く)

[illegible]





## 【編集後記】

昨年10月末の第49回協和うとう会の打上会の席で、50周年記念誌の編集が話題となり、翌日には安嶋さんよりメールで、記念誌表紙に故加藤会長筆跡「うとう」の使用提案等があって、私の下記の「電子版 記念誌作成試案」となった。

2010.11.01 山家

電子版 記念誌 作成試案 (1)

【作成内容】

## I。表紙・体裁等

- 1) 表紙は安島氏提案に沿って、レイアウトする。
- 2) 記事は基本的に横書きとする。
- 3) 色づけ、イラスト等を取り入れる。

## II. 記事・内容概要

- 1) 目次
- 2) 巻頭文等
  - ① 故加藤会長の挨拶文（２０周年記念誌より転載）
  - ② 故新井会長の挨拶文（                ”                ”                ）
  - ③ 創立時の幹事（高橋、磯部、西村、富岡各氏の感想文等）
- 3) ５０年を振り返って
  - ① 年表（回数、会場、参加者、写真リンク等）
  - ② 各回の思い出、苦労話、特記事項等
    - i . １回～４０回までは、各記念誌より抜粋
    - ii . ４１回～４９回までは、安島氏を中心に作成する。
  - ③ 番組表
  - ④ 出演者・演目等の解析（演目ベストテン等）
- 4) 会員の情報等
  - ① 参加・不参加は別とし、現存する会員に「うとう会」の思  
近況等を作成依頼する。
  - ② あいうえお順に掲載する。

以上

当時はすでに「協和うとう会」のホームページは完成しており、会員の皆さんにも好評を得ていたため、このツールを使って会員間の連絡・確認をすれば、迅速な情報伝達も可能だし、無駄な費用も掛らないので、先ず電子版で作成することを提案した。

その後、関係者の協力により会員情報も集まり、およそ 90%程度の仕上がりになったので、50回記念会場で記念誌案を披露し、不足している情報・写真や当日の記事等を追加して完成したい。なお、今後もホームページの掲載を続け、51回以降も「協和うとう会」の情報を発信して、会員の情報交換の場にしたいと思っている。

最後に、安嶋さんをはじめ関係者の皆さんの、ご支援・ご協力に深く感謝いたします。

編集担当 山家 多喜男